

がっこうぐらし! 守護霊ルート 通常プレイ

景名院こけし

最近流行りのRTAに影響されて書き始めたので初投稿です。

タイトル通り、学園生活部の守護霊になってメンバーたちを無事卒業まで導くルートです。

(RTAでは) ないです。

俺がめぐねえだ……

目次

パート 1	キャラメイクからいつもの屋上まで	1
パート 2	屋上イベント	13
パート 3	三階制圧	23
パート 4	学園生活部始動	31
パート 5	真夜中の儀式	41
パート 6	お別れ	49
パート 7	こころのきずあと	59
パート 8	出張	67
パート 9	出張 2	75
パート 10	出張 3	81
パート 11	家庭訪問	89

パート 12 しんにゆうぶいん！

パート 13 きもだめし！ 1

パート 13b 一方その頃

パート 14 おてがみ

パート 15 うんどうかい！

パート 16 襲来、ヘリ爆弾

パート1 キャラメイクからいつもの屋上まで

youtubeに上がってた変身バンク動画の存在によりシンフォギアXVのネタバレ喰らって2か月くらい萎えてたので初投稿です。

がっこうぐらし守護霊ルートプレイ！ いきまーす！（天パ）

最近RTA流行ってますね。ちょうどアプリも来たことだし、便乗して何かしようと思ったんですが私は走者ではないので、タイトルにある通り普通に守護霊ルートをプレイしようと思います（普通のルートとは言っていない）

ちなみに守護^{俺がめぐねえだ}霊ルートとは、ゲーム^脂オーバー時に低確率で入ることができる、文字通り肉体を捨てて学園生活部の守護霊となり、みんなが生存できるように陰から助けるルートです。直接的な干渉がしにくい代わりに“彼ら”から襲われない自分だけムテキモードでもあります。脂肪^{俺がめぐねえだ}済みなんだから当たり前だよなァ？

ではゲームスタート！早速キャラメイクです。

RTAではないので入力速度を考慮する必要ありません。ここは既存キャラから選ぶのではなく、じっくり今回のプレイに沿ったキャラを作り上げていきましょう。

まずは能力値がランダムに生成されます。結果が気に入らなければリロールすることができますが……今回のプレイでは“意志”の能力値が重要になってきますので意志が良い値になるまでリロールしましょう。

……………はい、いい値になりましたね。出た結果はこんな感じ。

筋力…女子高生（ふつうの。断じてシャベルゴリラとは違う）

知力…高卒（卒業・進学には問題なさそう）

直感…ヌケサク（前が見えているのかすらちょっと怪しい）

器用…普通（割と綺麗な字が書ける）

意志…鋼（ゲロ吐きながら全力疾走だってできる）

魅力…かわいい（かわいい）

直感以外は平均もしくはそれ以上。なかなかいいキャラが生まれましたね。

では次にフィートの取得です。デメリット効果のあるマイナスフィートを取得すると、後でキャラを強化できる成長ポイントがもらえます。これ、本来はレベルアップでしかもらえないものですので、意志と知力以外を捨てて成長ポイントのボーナスをいくらかせしめておきましょう。あとで必要になりますのでね。

・片腕骨折(一) 筋力と器用にマイナスがつく代わりに成長ポイントが入る。初期装備に固定ギプスと包帯を追加。

・隻眼(一) 器用と直感にマイナスがつく代わりに成長ポイントが入る。初期装備に眼帯を追加。

・病弱(一) 筋力にマイナスがつく代わりに成長ポイントが入る。

・コミュ障(一) 魅力にマイナスがつく代わりに成長ポイントが入る。

・虐待の跡(一) 筋力にマイナス、直感と意志にプラスがつく。成長ポイント
は入らない。

・靈感(十) 所謂「めぐねえ」^脂がみえる。直感にプラスがつく。ゲームオーバー^肪

後に幽霊モードで続行できる確率2倍。幽霊モードでのステータス強化。

・黒魔術(十) 儀式を行うことで確定で幽霊化^{めぐねえか}できる。他にも効果があるがそ

れは後述。初期装備に魔法使いっぽいローブを追加。

はい、いろんな意味で不穏なのばかりですね。守護霊^{俺がめぐねえだ}ルートでプレイする関係

上肉体は途中から要らなくなる（サイコパス）ため、意志と知力以外の能力値は捨ててしまっても問題ありません（問題ないとは言っていない）

という訳で、遠慮なくマイナスフィットを上限の5個まで取っておきました。

そしてプラス（？）のフィットとして“靈感”と“黒魔術”を取りました。守護^{俺がめぐねえだ}霊

ルートを狙って遊ぶ場合、取っておくと非常に便利なものになります。というかこれがないとやってられません。

さて、フィットをとったところでステータスが変化しました。現在はこんな感じ。

筋力…かたつむり観光客（貧弱貧弱ウ！）

知力…高卒（卒業・進学には問題なさそう）

直感…ドジっ娘（足元注意DA！）

器用…不器用（汚いけどまあ読めるか、くらいの字を書く）

意志…超合金ニューZ（血を吐きながら折れた足で全力疾走だってできる）

魅力…不気味（元の顔はよさそうだが、全体的にやつれてて目に隈とかできてる。

あと隻眼)

さて、“幽霊化”の準備が整うまで生き残れるのか、心配になってきました。がまあ何とかなるやろ(フラグ)

最後に名前と性別、年齢、所属を決めましょう。

名前は 幽波紋^{くらなみ あや}。断じてスタンドとは読まない。性別は女性、年齢は18。ゆきちゃんと同じクラスの三年C組です。

キャラメイクが終了したら難易度選択です。迷うことなくハードコアを選択します。中断以外のセーブができなくなる代わりに各種スキルを使用した際、再使用可能になるまでのクールタイムが少し短くなりますので。

幽霊プレイをする場合はクールタイムが重要になるためその恩恵を受けない手はありません。え？途中で乙ったら？キャラメイクからやり直しです(真顔)慎重に行きましょう。

ではいよいよスタンドちゃんの冒険が始まります。オープニングムービーは目にタコが住み着くくらい見たのでキャンセルです。見たい人は自分でプレイして♡所属を三年C組にしたためか、ゆきちゃんの補習のシーンから始まりました。私

はこのパターン初めて見ますね。アプデの追加分でしょうか？

めぐねえに見守られながら教科書と対面して悩むゆきちゃんの隣には、貧弱な後ろ姿……スタンドちゃんが座っています。んん？ お前卒業に問題ない学力とちゃうかったんか？？？

いや、よく見るとゆきちゃんの方へ身を乗り出して開いている教科書を指さしたりしていますね。どうやら補習に付き合っただけでいるようです。仲良しか？ これにはめぐねえもニッコリ。最初から好感度高そう。期待できますね。

しかし、平和な一幕だなぁー（慈愛の笑み）まあこの後すぐゾンビクロニクルに変貌するんですけどね（ハイパー無慈悲）

……はい来た。外から悲鳴が上がります。困惑するゆきちゃんとめぐねえ。

ここで二人をガン無視して校外に全力ダッシュとかいう狂ったこともできるのがこのゲームの良いところですが、学園生活部に入るなら素直に屋上へ二人をいざないましょう。

イカッー （ブッブッブッブッブッ）

！ ヌッ…）

ここは二階にある三年C組の教室。まずはほかの先生と合流するため三階にあ

る職員室に行こう！ と提案し、そこにも「彼ら」が湧いて人を噛んでいるのを視認したところで「ヤバイ！ にげる！」って感じで屋上に押し込みます。

途中何人かの「彼ら」に襲われますが、片腕骨折の効果で初期装備に入っているギプスが地味に役に立ちます。とてもかたい。ここなら噛まれても全然大丈夫。しかも一度噛んだら何故か追撃せず勝手に離れてくれます。これなら振りほどく必要もなく、かたつむり並みの筋力でもなんとか生存できるので、どんどん盾に使っていきましょう。折れた腕をブン回すことになるので、スタンドちゃん自身はめっちゃ痛いでしょうけど（鬼畜）。超合金ニューZ製の硬い意志で耐えてくれ。成長ポイントももらえるし、利点のあるマイナスフィートは意外と多いですね。終盤になるとやっぱジャマですが。

では今回はここまで。次回は屋上から再開です。

【キャラ視点】

たけやゆき

くらなみあや

丈槍由紀から見た幽波紋という少女は「なんというか、変わった子」であった。背丈はクラスの誰よりも小さく、うなじを隠すくらいまで伸びた青い髪は触ると少

し傷んでいる。右目は医療用の眼帯で隠れているし、残った左目の下には隈ができている。最近では左腕を骨折したのか包帯で吊っている。

そこまですら由紀は怪我や目の隈を心配こそすれど、印象という事では何も気にしない。しかし制服の上から纏った、映画の魔法使いのような漆黒のローブに、手の甲にマジックで書かれた謎の模様（日替わり）。さらには時々虚空に向かって何やら話しかけているし、授業ノートの右半分は発音に難儀しそうなカタカナの羅列に制圧されている。

そういった奇行の数々を目の当たりにしたときは正直引いた。話しかけてみても蚊の鳴くような声で一言二言返してくるのみで、会話がなかなか続かない。最近はかなりマシになったが。

（でも、頭が良くて……すっごく優しい！）

現に、何の得にもならないのに放課後の時間をつぶして補習に付き合ってくれている。おかげで思っていたよりも早く終わりそうなのだ。今度お礼をしなくては、と由紀は考えた。

（それに、実は……）

これまでの紋とのことを思い出していたところで、どこから誰かの甲高い声が聞こえてきた。数秒後にそれが悲鳴だと理解し、由紀と、補習を担当していたためねえ……佐倉慈さくらめぐみの顔に緊張が走る。紋はいつも通りのようだが。

「い、いいいいいい今の……って、ひ、悲鳴？」

そう、いつも通り、極度に緊張している。

「く、幽波さん、落ち着いて？」

「あ、あやちゃん。大丈夫だよ、私もめぐねえも一緒だからね」

「もう、めぐねえじゃなくて佐倉先生」

「はい」

誰かがひどく取り乱している可他の人は逆に冷静になるとか、何かのマンガで言っていたような気がするが、まさにこの状況の事だろう。ある意味、紋のおかげで落ち着いて行動できそうだと、由紀は思った。

——そう思ったのも束の間、すぐにその平静は崩れ去ったが。まずは三階の職員室に向かい、別の先生と合流しようという事になり、階段を上がるとまず目に飛び

込んできたのは暗い赤色に染まった、本来は白いはずの壁だった。

「……え？」

次いで、その赤色の発生源、首から血を噴き出して膝をつく、名前は知らないが、全校集会などで見覚えのある教師の姿。そして、それに掴みかかっている、口元を真っ赤に染めた、制服を着た「誰か」へと視線が動く。

教室から出た時のどこか緩んだ空気は一瞬で消し飛び、赤く染まった壁とは逆に頭が真っ白になる。

「え？ あ……」

そして呆然とする由紀達の下へゆっくりと、その「彼」が、教師の下を離れて迫ってくる。

（に、逃げなきゃ……）

そう思うが、足がすくんで動けない。そして「彼」はそんな由紀に慈悲を与えてくれるほどの理性をすでに失っているらしい。由紀の事を、何故か動かない楽な餌とは思っていないかのように、淀みなく食らいつく態勢に入る。

「ッ！ ゆきちゃんッ！」

“彼”の齒が由紀の肩に突き立てられようとする直前、紋が飛び出し、包帯で吊っていた左腕を由紀と“彼”の間にねじ込んだ。

「痛……ううッ！」

紋の顔が苦痛に歪む。齒が腕に突き立ったからではない。折れた左腕を無理に振り回したことによる痛みだ。骨折固定用のギプスに阻まれ、予想外に硬い齒ごたえに困惑でもしたのか“彼”は口を離して少し離れる。

意外にも一番に冷静さを取り戻した紋が上り階段を指し示して、今まで聞いたこともないような大声で叫んだ。

「下からも来てるッ！ 屋上に逃げよう！」

「え、ええ！」

「っ！ うん！」

丈檜由紀から見た幽波紋という少女は“なんというか、変わった子”で、けど頭が良くて、優しくて、そして……

（実は誰よりも強くて、すごく頼りになる）

……そんな存在だった。

誰よりも強い
(意志の能力値だけ)

パート2 屋上イベント

感想いっぱい来て嬉しいので初投稿です。

では再開します。

屋上に飛び込むと我々が要注意人物のりーさんが作業中ですね。どうやら騒動に気づいていない様子。糸目の状態で「？」って感じでこっちを見てきます。かわいいい。

ちがう、そうじゃない。(セルフツッコミ)段差が苦手なはずの“彼ら”がこの時ばかりはスイスイ階段上って追いかけて来るので、三人で必死こいて扉を押さえましょう。なおスタンドちゃんの筋力のかたつむり。他の人が加勢できるスペースが空く分、どいた方が良いまであります。

その加勢できるりーさんは何やら不穏な状況になっていることは察しますが、それでもまだ「???」(アヤヤ)となっている(かわいい)ので加勢してくれませ

ん。どう動いていいか決めあぐねているようです。仕方ないね。状況分かったらキッチリ働いてもらうからなア？（豹変）

あっ（絶望） 押す力つおい これ無理……

破られんの速すぎィ！（完全敗北）

どうやら調子に乗って筋力を犠牲にし過ぎたみたいですね。一体の“彼”と戦闘開始です。さーてどうすっかなー。一体だけなら意志の力でギプスを振り回せば何とか感染はせずに済みそうですが、まともなアタッカーが居ないこの状況でどうやって撃退したものか……攻撃手段がなければそのうち“彼ら”の増援が来てギプス以外を噛まれてザ・エンドです。

「ごめんなさいっ！」

おっ？

めぐねえが咄嗟にという感じで“彼”を突き飛ばしました。哀れな“彼は池田屋事件階段転落して場外リタイア。やるやん（炭酸じゃんけん）

その代わりに腰が抜けたように座り込んで泣き出してしまいますが。まあ、そうなるな（航空戦艦）

そんなめぐねえを横目に、ドアに簡易バリケードを張ります。すぐにツインテ陸上ガールが先^{シヤベルゴリラ進化券}輩を連れて来るのでいったん開けないといけません、ここでバリケードを張っておくと、何故か「彼ら」がこの日に限り上がって来なくなるので、忘れないようにしましょう。張らない場合高確率で再襲撃されます（n敗）

……はい、来ましたね、我らがメインアタッカー（予定）、くるみちゃんです。ではとつととバリケードを完全封鎖しましょう。明日になれば「彼ら」は比較のおとなしくなりますし、三階に限れば数も相当減ります。

あとは園芸部の皆さんが使っていたと思しき小さいスコープを拾います。研いでおけばよく刺さりますし、持ち手のところにひもが通せるようになっていて、長めのひもを通しておけば打撃武器としても使えます。回して遠心力をチャージしてから殴る必要があるので隙も大きいですが、これならかたつむりなスタンドちゃんでも片手でそれなりの威力が出せます（当てられるとは言っていない）し、運が良ければ頭に刺さって一撃で倒せます。ひもも普通に落ちていたので拾っておきましょう。

コンボ武器制作の時間DA！（おもむろに用途不明のガムテープを取り出す）

“ひもを通したスコップ”が完成すれば今日できることはほぼ終わりですので、あとはくるみちゃんが先輩をざっくりやって女子高生からゴリラにクラスチェンジする様を聖母のような笑みで見守りましょう。無論、画面内のスタンドちゃんは深刻な表情してますが。

ただしざっくりやった後もずっと放っておくと、くるみちゃんは半狂乱で先輩をザクザク刺し続けて正気度がマッハで減少し続け、終いには完全に発狂して襲ってくるので、頃合いを見て止めに入りましょう。抱き着いて止めればゆきちゃんが援護してくれます。あとはアニメのあのシーンのように、自分のために泣いてくれるゆきちゃんのおかげで、くるみちゃんは正気を保ったままゴリラになれるわけですね。めでたしめでたしです（鬼畜）

さーて、ではそろそろ止めに……痛アイ!?

抱き着こうとして近づいたらカウンターをもらいました。初期の正気度が低かったのでしょうか、短時間のザクザクで既に発狂していたご様子。

あれ？ 早くも再キャラメイクか？ 嫌じゃ（雑魚）

……いえ、一発で許してくれました。ギリギリセーフ！（安堵）一発だけなら

誤射かもしれない（震え声）

その後は泣き出したゆきちゃんをなだめる仕事を通じてくるみちゃんの好感度稼ぎもやっておきつつ、みんな仲良く屋上の硬い床で就寝。一日目が終了となります。

こんな序盤でコロコロされるかとヒヤヒヤしたゾ……

【キャラ視点】

佐倉慈は震える手を押さえながらあふれ出て来る鳴咽をこらえきれず、許しを請うように頭を垂れて床を涙で濡らす。

何が起こっているのか、それはまだわからない。だが確かなことが一つある。自分は人を……少なくとも人だったはずのモノを、殺した。

突き飛ばした相手は何度も話したことがある教師だった。三階に上がった時点で襲われて倒れていたはずの彼が起き上がって追いかけてきたことになる。

明らかに正気ではなかったし、首を食いちぎられて動いていたのはおかしい。それにあのまま黙って見ていれば近くにいた生徒が噛まれていた——有名な怖い映画のように、噛まれれば伝染するのだろうという事が何となくわかった——仕方がなかった！

しかしどんな理由があろうと、見えてしまった“あの光景”を作り出したのが自分であることに変わりはない。

転がって落下しながら体の至る所を角に打ち付け、そのたびにおかしな方向に曲がっていく四肢、すでに開いていた傷口から激しく飛び散る赤い液体……そして最後に下の床にたたきつけられ、ちょうどこちらを向いて止まった顔が、空虚な目を見開いてこちらを見つめる光景……

すぐに一緒にいた生徒の幽波紋が扉を閉め、封鎖してしまったためもうそれは見えない。

そのあと陸上部の恵飛須沢胡桃^{えびすぎわくるみ}が卒業生を連れて逃げ込んできたときに、もう一度下を見る勇氣は出なかった。

もう一度“彼”と目を合わせてしまったら、今度こそ押しつぶされてしまいそう

な気がしたから。

止まらない震えと涙を抑え込もうと、どれくらいうずくまっていただろうか、彼女はふと、場の空気が変わったことを感じ取る。気づけば周囲の悲鳴はすっかり途絶えていた。自分たちのように一時的にでも安全な場所に避難して一息ついているのか、あるいは一人残らず……

震えはまだ止まってはくれないが、顔を上げて屋上の様子を見ることはできた。

——胡桃の連れてきた卒業生が、ゆっくりと立ち上がっているところが見えた。慈は心臓が跳ね上がるのを感じる。その卒業生の動きは、まるで「彼ら」のように、もう動かない体を無理やり動かしているような、どこかぎこちないもので……

「せ、先輩？」

胡桃の不安そうな声が、妙に静まり返った屋上に響く。近づいて来る彼の様子が明らかに異常であることを感じ取り、後ずさりし始める。

屋上に逃げてきたとき、彼は怪我をしていた。慈は見えていないが、陸上部の練習していたグラウンドにも「彼ら」が居たのだとしたら……

「うわああああああああ！」

尻もちをついた胡桃が、悲鳴を上げながら落ちていたシャベルを振り上げる。

「あっ」

シャベルの先端は鈍い音と共に“彼”の首を抉り、胡桃は返り血で真っ赤に染まる。その瞬間、胡桃の中の何かが切れた。

「あ……ああっ！ あああああああああああっ!!」

立ち上がると、仰向けに倒れた彼に向かってシャベルを何度も突き刺し始めた。呼吸は荒く、瞳孔の開き切った目の焦点は合っておらず、もはや自分が何をしているのか分かっていない。ただ恐怖と疲労で冷静な判断力を失った脳が発する信号に従って機械的に、しかしでたらめに、ひたすら叫びながら、シャベルを握った手を突き出し続ける。

誰もがその“作業”を呆然と眺めていた。

「やめ……て……」

幽波紋、ただ一人を除いて。

「お願い……やめて……」

蚊の鳴くような声で言いながら、ふらふらと、胡桃の方へ近づいていく……その目は胡桃を見ているようで何か、別の物を見ている。その時の紋の顔を見た慈には、そう感じられた。

（っ！ 違う！ そんなことよりも！ 今の恵飛須沢さんに近づくのは！）

「!? あああっ！」

「痛っ！」

慈が危惧した通り、紋は反射的に振りぬかれたシャベルで肩を強打し、その場に倒れ込む。そのまま追撃に入ろうとした胡桃だが、怯え切った紋の顔が目に入ったところで、ようやく自分が何をしているのかを理解し、シャベルを取り落とす。

「人？ ごめ……ち、違うんだ……てっきりあいつらだと……」

「大丈夫……大丈夫、だから……大丈夫……大丈夫……」

「お、おい……？」

うわごとのように繰り返し繰り返す紋はやはり胡桃を見ていない。たった今自身を襲ったシャベルではなく、別の何かを恐れていた。

その後泣き出した丈槍由紀たけやゆきを胡桃と立ち直った紋の二人でなだめているところへ歩み寄りながら、胡桃を止めるのは本来自分の役目だっただろうに、ただ見ているしかできなかった自分を思い出し、慈は強く唇を噛みしめる。教師の「彼」を突き落としたことはまだ頭から離れない。震えも止まらない。

それでも、ただうずくまって泣いている場合ではないことは嫌でもわかった。

今回のりーさん、ただ突っ立っているだけ（かわいい）！

パート3 三階制圧

某ゲームにドハマりしてて遅れたので初投稿です（土下座）

こんばんは

現在スタンドちゃん、皆と仲良く屋上の床で就寝中でございます。いいか、睡眠は超重要だぞ（東方憲助）一定時間寝ずにいるとペナルティが入りますし、それ以外にもランダムイベントが発生することもあります。

流石にベイビースタンド（花京院並感）に襲われたり装備が呪われたり宝の地図を夢の中で手に入れたりなんてことはありませんが、超低確率で空気感染イベントが起こったりはします。その場合さっさと地下に行って薬手に入れないとゲームオーバーです（ガチギレ）

今回は……あ、今日お亡くなりになった「くるみちゃん」の先輩が夢に出てきました。このイベント、靈感フィートをとっていると起こりやすくなります。

くるみちゃんのことを頼む的なことを言われました。仕方ないことだったとはいえ自分を刺した相手の心配が真っ先に出て来る聖人。愛の成せる技でしょうか（あなること分かって見守っていた屑）

今回はゲーム的な効果は特にありませんが、ある程度好感度を稼いだキャラでこのイベントが発生するとそのキャラが持っていたスキルとかを貰えたりします。そのスキルが生存に役立ったりすると熱いですね。とはいえ本プレイでは、助けられるメンバーはできるだけ助けていくスタイルで行きますのでその展開は無いです。幽霊になって守る相手が生きてないと意味ないですからね。

では睡眠イベントも終わったのでとっと起床しましょう。おはようございます。

ゆきちゃんは昨日のことが夢じゃなかったことを嘆いてますね。後でそれとなくケアしておかなければ“最近、学校が好きだ”とか言い出すのも時間の問題です。気を付けましょう。

りーさんは“すぴー”とか言いながらまだ寝ている様子。かわいい。でもお前が一番の爆弾だってプレイヤーはみんな知ってるからな？ 彼女に厨房以外で包丁

を与えてはいけない。あ、起きましたね。おはようございます。

めぐねえは疲労のにじむ笑顔で挨拶を返してくれます。その後は何か決意した顔になりますね。先生というのは力仕事（本人談）なので筋力も高いですし頼りになりそうですが原作で噛まれた前科があるので要注意です。

くるみちゃんは皆が起きたのを確認すると、覚悟完了した顔で三階を制圧することを伝えてきます。流石の戦闘員。殺意が違いますよ。

めぐねえがついて行くと言い出すので便乗しましょう。

ゆきちゃんとめぐねえ

の両方に止められ、くるみちゃんにも折れた腕をチラ見して洩られますが、"ついで行く"の選択肢連打でゴリ押しすれば折れてくれます。すまないがここでついで行かないと、噛まれる判定が全部ランダムになって、最悪めぐねえが噛まれてめぐねえになってしまうことがあるんだ。めぐねえは俺だけでいい（支離滅裂な思考・言動）

ゆきちゃんをりーさんに任せて早速バリケードの向こう側に殴りこみましょう。階段を下りると何人かの"彼ら"がうろついているのでぶっ飛ばしに行きましょう。悪いが黒魔術の儀式場……と、学園生活部部室を作るための犠牲になってもらう

！ 遠心力ひも付きスコップをくらえ！ オラァ！（スクラッシュドライバー）
おっと、一撃じゃ沈まないな？ 折れた腕ガード！ ……ん？ 今ちょっとラグ
が？ あっ（察し）昨日くるみちゃんにぶん殴られたせいで左腕動かしづらくなっ
てるな？ もともと折れてるけども。しかしまあ何とかガードが間に合いました
ので改めてもう一回オラァ！（スタープラチナ）これで沈みましたね。

スタンドちゃんは不器用なので本格的な戦闘ではうまく攻撃を当てられません
が、今回のように不意打ちで一発、噛みつきをガードした際の硬直を狙って一発、
という感じに止まっている^{まど}的になら当てられます。確実な隙を作れる、やはり骨折
はプラスフィート（確信）

“彼ら”は夜になると帰宅しようとしていますので、段差が苦手なことも相まって朝
の三階にはあまり数が居ません。スタンドちゃんが一体倒している間にめぐねえも
一体、くるみちゃんが二体やってくれるので制圧は結構楽に終わります。ここで油
断させといてみんな大好き雨の日に地獄を見せて来るとても素晴らしい難易度調整
ですね。ガッデム。制圧後はゆきちゃん達を呼び出してバリケード制作のお時間
です。

ここも油断してると “彼ら” が上がってきて誰かが噛まれますので気を付けてお
きましよう。

【キャラ視点】

恵飛須沢胡桃は自分^{えびすざわくるみ}が冷静でなくなっていることは自覚していた。しかし同時に、今更立ち止まらないことも分かっていた。

“彼ら” に噛まれれば仲間入りしてしまう。あの先輩のように、理性を失い、仲間を増やすために目の前の人間に食らいつくだけの存在になり下がる。そうならもう人間じゃない。だからこれは殺人じゃない。やらなければ自分か、ほかの誰かが噛まれて人でなくなってしまう。

学校の外がどうなっているかは分からない。でもきっと助けは来る。それまで、全員で人のまま生き残らなくては。そのためには、迷ってはいられない。

（あれは人間じゃない……あれは人間じゃない！）

自分に言い聞かせ続ける。有り難いことに、切羽詰まった人の脳というのは騙し

やすいようで、徐々に“彼ら”の姿に黒いもやのようなものがかかって見え始める。視界の中の、見れば人だったことが分かる。“彼ら”が、人に似た形の黒い何かに姿を変えていく。人ではない、不気味で危険な化け物に変わっていく。こうなればもう迷わずに済む。胡桃は手近なところにいた“彼”の頭めがけてシャベルをフルスイングする。

驚くほどあっさりと倒れて動かなくなった“彼”を見て少しだけ安心する。屋上の時は相手が既に動かなくなっていることにも気づかず何度も刺し続けたが“彼ら”は人と同じように、殴られれば動かなくなる……人でなくなってもそこは変わらないようだ。

ふと振り返ればついてきた慈めぐみと紋あやが同じく“彼ら”をそれぞれの手にした武器で殴り倒していた。

慈に関してはまだわかる。現状、自分たちの中で唯一の大人だ。普段からあまり気が強くなく“先生というよりお姉さんっぽい”などと言われていたが、責任感が人一倍強いこともみんな知っていた。生き残った生徒を守るために、立ち上げれる強さは持っているだろう。

しかし紋に関しては、正直意外だった。見るからに力のなさそうな細い体や、昨日の屋上で左腕の怪我を悪化させてしまったこともあり、ついて来ると言い出した時にはやめさせようと思った。だが彼女は絶対に自分もついて行くと譲らなかった。普段の学校では“変人”として有名で、そのやや不気味な容姿も相まってあまり近づこうとする者はおらず、そのうえ近づいたとしても、彼女の声をまともに聞いたことのある者はほとんどいないというくらいにしゃべるのが苦手だ。胡桃を含め、周りのほとんどは慈以上に気が弱いという認識だった。

そんな紋が、こちらが何度屋上に残れと言っても、意志のこもった目でしっかりとこちらを見据えて、やや震えているものはつきりと聞き取れる声で食い下がってきた。気の強い胡桃を折れさせるほどに。

今もそうだ。折れているうえに昨日殴られて痛むはずの腕を歯を食いしばって動かし、固定ギプスを盾にしながら戦っている。武器は筋力が無くても威力の出る、振り子のような物を屋上にあったスコップとひもで自作して来ていた。こんな状況で頭も回るようだ。普段の学校での姿からは想像できない光景がそこにはあった。三階にいた“彼ら”がすべていなくなり、上の二人を呼んで教室の机などを使っ

てバリケードを作り上げていく作業の最中、ようやく一息ついた胡桃は辺りを見渡す。

“あの人”を刺してしまったことや先への不安や“彼ら”が押し寄せる恐怖に潰されかけていた胡桃だが、今回一緒に戦った二人や、屋上で自分のために泣いてくれた由紀^{ゆき}、今もてきぱきとバリケードを組み立てていく、戦い以外で頼りになりそうな悠里^{ゆうり}、みんなが揃っていれば……樂觀的かもしれないが、何とかなるのではないか、そんな風に少しだけ安心できて、冷静になれた。

パート4 学園生活部始動

初投稿です（直球）

こんにちは。突然ですが、学園生活部、結成です！

……何言ってるんだコイツって顔してますね？ でもちょっと待ってほしい。大したイベントもなく延々バリケードのチェックしたり職員室と生徒会室の掃除したり遺留品からなけなしの食料や資材回収したりして寝るだけの光景なんて垂れ流してもしょうがないじゃないですか。カットですよカット。

さて、りーさんと話し合ったためぐねえからここでの生活を部活という事にしないかと相談されます。もしみーくんがこの時点でいたら「そんな場合ではない」と難色示したかもしれません……いや、部屋から出られなくて一人で暇だったとはいえ、学校と同様（おそらく）の時間割生活とかやってたし、普通に同意するか？ ……どのみち彼女は現在親友と一緒にそのショッピングモールの部屋にしまわれ

ていますので問題なしです。

部の結成に同意したことで口実ができますね。部員の証を作ると宣言したのち、黒魔術フィートを駆使して装備アイテムの“お守り”を作って配りましょう。スタンドちゃんの髪の手入れで部員との絆の力が高まり、幽霊モードに入った時に持っている人の好感度に応じてパワーアップできます。これをやっておかないと、いくら意志が強かろうが全てにおいて中途半端なクソザコスタンドまっしぐらなので、自然にお守り配る流れに持つていける学園生活部結成イベントはちょうど起きてほしかったところです。助かります。

さあ作業開始DA！

……スタンドちゃん、片腕折れてるせいで器用さのステータスが“不器用”なんですよね。時間かかる……やりづれえ（雑魚）

「何作ってんの？」

おっと、お守りを作っていたら何者かが背後から話しかけてきました（すつとぼけ）はい、カットしている間にみんな大好きチョーカーさん、本名・柚村貴依ゆずむらたかえさんも加入しています。三階制圧して静かになったところにふら〜と現れてくれま

した。『彼ら』かと思って殴りそうになったのは内緒。本当は救出イベントやる予定だったんですが、たまにこうして手間が省けたりします。おかげで見どころさんがお亡くなりになりましたがね！

まあプレイヤー的には助かったのは事実です。救出イベントやろうと思ったら隠れている場所次第で余計な戦闘をさせられることになりますので。この貧弱ボディなうちは戦わないで済むに越したことはありません。

部員が増えるということはお守りの所有者も増えるということになるので死後の強さに直結します。という訳で出来るならみーくんはもちろん、圭ちゃんも救出したいところ。頑張って無敵のスタープラチナ目指すゾー……流石にあんなガチムチな見た目にはならないですが。

お？ チョーカーさんがお守り制作を手伝ってくれるそうです。黒魔術が関わってくるのは完成した後。作る作業自体は誰がやっても同じなので有り難くお願いしましょう。現状での人数分以上に作ろうとしていることをツッコまれますが……ほら、圭ちゃんとかみーくんとか来る予定なので……（震え声）

【キャラ視点】

柚村貴依はこの現実感の無い状況に何とか適応し始めていた。

初日は本当に訳も分からずうろたえ、逃げ回り、ようやく飛び込んだ掃除道具用ロッカーの中で一睡もせず震えていた。

一夜明けたら、上の階で打撃音や、もう聞こえなくなっていたはずの、生きた人間の叫び声が聞こえてきた。他に生きている者がいるなら合流したいと思った。いつまでもロッカーの中で震えていることはできない。その時にはもう立ちっぱなしの脚に限界が来ていた。掃除道具を外に出せば座ることもできるのだろうが、ロッカーの開閉というのは意外と大きな音がする。それで気づかれては意味がない。それに、生きていれば空腹になるし眠気も襲ってくる。

勇気を出してロッカーから出ると、幸いにも「彼ら」は近くには居なかった。上の階の騒ぎに反応して階段に向かったようにも思われるが、明らかに絶対数が減っている。どうやら夜の間にいくらかはどこかへ行ってしまったようだ。

階段の方へ行ってみると、やはり「彼ら」が集まっていた。貴依の足音に反応して振り向いた「彼ら」の一人と目が合った瞬間、せっかく沸いた勇気がくじかれた

のを感じた貴依はそのまま近くのトイレに駆け込み、個室の鍵を閉めて立てこもった。目が合った「彼」が追いかけてきてしばらく扉を叩いていたが、しばらく耐えているうちに離れていった。

また一夜明けて、ロッカーよりは広く、開けられる心配の少ない個室にいたことで何とか少しだけ寝付くことができた貴依は、もう一度勇気を出して階段の方を見てみた。

「今は居ない……よし」

死角に「彼ら」が居ないかどうか警戒しながらゆっくりと階段を昇っていくと、積み上げた椅子や机を縛って固定したバリケードが目に入った。やはり上の階には生存者がいたらしい。

バリケードは上の方が開いており、よじ登れば乗り越えることもできそうだった。「よい、しょっと……痛った……ふう、有刺鉄線なんてどこから持ってきた……の……」

「…………… (ヒュヒュヒュヒュ)」

有刺鉄線で怪我をしそうになったが何とか無事にバリケードを乗り越え、三階の

廊下に出た貴依が目にしたものは、シャベルを持ったツインテールの少女と、その隣で何かを括り付けたひもを振り回す、容姿だけはよく見知った不審者。

「なあ、あや。あれ生存者……だよな？」

「……うん。クラスメイト（ヒュヒュヒュヒュ）」

「じゃあ何で威嚇してるんだよ……」

「ごめん、つい……」

「あいつに言ってやれ？」

「……ごめんね？」

「え、ああ、うん……こっちこそ、急に押し掛けて……」

それが同じクラスで過ごしてきた柚村貴依と幽波紋くらなみあやが、初めてまともに交わした

会話だった。

（想像以上に変な娘コでびっくりしたなあ……）

その想像以上に変な娘は、今度は机にかじりついて片手で苦戦しながら何やら作っている。聞けばここでの生活を部活動のようなものとして振る舞うことにしたらしい。確かに、そうして日常を想起させるようにすれば、この状況で生きる苦し

みも和らぐことだろう。非日常の中で震えるしかない辛さを数日前にたっぷり味わった貴依にとっても悪い話ではなく、積極的に協力しようと思った。

今は部員と顧問という関係となるメンバーでおそろいのお守りを部員証代わりに作っているらしい。話が終わって紋は作業を再開するが、やはり片手では手こずっている。

「貸してみなよ。手伝ったげる」

「え……あ、ありがとう……」

貴依は紋の隣に腰掛けると、すでにできていたものを参考に真似して作業し始める。

数十分後、人数分のお守りが完成した。

なのだが、紋は作業を続けようとする。

「あれ？ もう人数分できてんじゃない？」

「部員……増えるから」

「っ！ そう、だね。きっと増えるよね」

「うん……絶対、増えるよ」

「よっし！　じゃあ気合い入れて作るか！」

希望的観測かもしれないが紋の言う通り、生存者が自分たちだけとは限らないし、いつか出会えれば、手を取り合ってくれるかもしれない。窓から見渡す限り街は“彼ら”だらけだが、さらに外はどうなのか分からない。ひょっとしたら救助が始まっているかもしれない。貴依はいかにしてこの日々を乗り切るかばかりが頭にあって、先の希望が見えていなかったことに気づく。

（変な娘だけど、こういうところは見習わないとね）

普段の教室では話しかけづらい存在だったが、こうして話してみれば、由紀ゆきが懐いていたのも何となくわかる気がした。

（しかし、どういう家庭環境だったのか……すごい細い体）

近づきづらかったもう一つの理由は容姿にもあった。お世辞にも栄養状態が良いようには見えない体躯に、妙な服装。

（さっきからたまに咳せき込んでるし……風邪？　見た目通り、体が弱いのかな）

そのうち物資を探しにバリケードの外に出ることもあるだろう。その時には風邪薬でも探してみようか、などと思いつながら、貴依は作業を進めていった。

空気感染＋病弱フィートⅡ死ゾ（ガバガバキャラクターメイク）

パート5 真夜中の儀式

BRAVE合金ガイゴの腕がもげたので初投稿です。

オイオイオイオイオイオイ（炭酸抜きコーラ）、死ぬわスタンドちゃん（絶望）

どうやらハードコアモードだと空気感染イベント起こっても自覚症状出るまで通知されないようです。おそらくもう発症から数日たってますね？ 手遅れですね？ さてはクリアさせる気ないな？

一応頑張れば生きて地下まで進撃できなくもないでしょうがまあほぼ無理です。メンバーの誰かがサヨナラします。

本当はみーくんと圭ちゃんを迎え入れてから好感度稼いで、無敵のスタープラチナ最強モード幽霊目指そうと思ってたのですが仕方ないのでここで幽霊化してしましましょう。

脂肪時の幽霊化を期待して好感度稼ぎに奔走するにしても、セーブデータの吹っ

飛ぶハードコアモードでやるにはリスクイすぎますし、何より幽霊化成功しても真っ先に“彼ら”の仲間入りした自身の肉体をオラオラする羽目になります。なのでさっさとへんじのないただのしかばねになりましょうね（サイコパス）

というわけで確定で幽霊になるための儀式を隠れてこっそり行いましょう。

自分以外全員寝たことを確認したら、起こさないようにそーっと抜け出して、科学準備室に向かいます。実験用にマッチとかおいてありますので。

火種が手に入ったら屋上に出ます。ろうそくを円形に並べてその中に自分の血でいかにも魔法陣を描いたら（大量出血）ろうそくに火をつけ、魔法陣の真ん中に寝そべります。そして自分のだけ特別に細工しておいたお守りを取り出し、それだろうそくの火を移して燃やします。

すると火が全身に燃え広がりますが、物理ダメージは無し。設定的には魂と肉体をつなぐ糸みたいなものを燃やす炎だとか。世界観どうなってるんでしょうね（今更）

全身の炎が消え去ったら儀式終了です。ここからはスタミナやら体力やら、肉体に関係するゲージが一切回復しなくなります。ゲームシステムさんがさっさとくた

ばれと言っていますね。

さて、血で描いた魔法陣を消し去っておきましょう。流石に頭おかしいと思われる好感度が下がりがねません（頭がおかしくないとはいってない）

屋上なら蛇口の水を直接床にぶちまけられるのでやりやすいですね。

では蛇口を……と思ったら、ちょうど雨が降ってきました。これなら放っておいても全部勝手に消えてくれますね。自分が濡れる前にろうそくだけ回収してさっさと三階に引っこ込みましょう。

雨が降るといことは“彼ら”が雨宿りし始めるということ。夜が明ける頃には“彼ら”ラッシュの始まりです。

苦手な階段もバリケードも圧倒的な数による試行回数での暴力で全部突破して三階の廊下が“彼ら”パラダイスと化すので迎撃に出しましょう。そこでわざと噛まれてあとは自分を犠牲にして皆を助ける感じにすれば最後に好感度をもう少しあげられますね。

ではバリケードが突破されるまで部室で待機しましょう。そっと席についたあと少ししたらりーさんが起きてきました。

“一人で出歩いてるんじゃないか”と思つて心配してくれたようですね。部室で大人しくしているスタンドちゃんを見てほつと息をついています（かわいい）まあさっきまで一人で出歩いてたんですけどね。

【キャラ視点】

若狭悠里は雨が窓や屋上の床を叩く音に反応していつもより早く目を覚ました。普段ならそれだけでは目を覚ましたりはしなかったが、今はこの状況で物音に過敏になっているのだろうかと自己分析する。実際には紋あやが出て行つた物音に気付かないことから、それほど過敏になつてるといふ訳ではないのだが。その紋が近くで寝ていないことに気づいた悠里は心臓が跳ね上がるような錯覚を覚えながら慌てて隣の生徒会室……今は学園生活部部室となつた部屋に飛び込む。

「りーさん？」

部室の椅子に座つて困惑したような顔をこちらに向けて来る紋の姿が目に入ったことで悠里は胸を撫で下ろす。

「もう、目が覚めたらいないからびっくりした……」

「ごめん」

流石に一人で出歩いているなどということはないだろう、というのは分かっていたものの、この紋の場合は“もしかして”という心配が湧いて来る。

硬いギプスで“彼ら”の噛みつきを防ぐため、折れた腕を無理やり振り回しながら、腕力もないのに小さいスコップで暴れまわる……そんな無茶なことを平気でやるのが紋だ。逃げられない時など、頼りになるのは確かだが、いつか取り返しのつかないことになってしまいうのではないかと気が気ではないのも事実だ。

土壇場に強いと言っても、元は決して体が強いという訳ではない。むしろかなり病弱だし、そもそも腕が折れているというのは既に戦わせてはならないレベルの負傷だ。

それでも彼女は戦いに出ることをやめない。いくら止めようとも絶対に聞く耳を持たない。変なところで押しが強いのだ。やると決めたことは何が何でもやる。それが危険な事でなければ素直に“助かる”といえるのだが……

悠里は紋の対面に腰掛けると、じっと観察する。ここ数日、咳込むことが増えますます弱って見えていたが、今はそれに加えて見るからに血の気が引いている。

本当にそのうち倒れてしまうのではないかと心配になる。

「最近、無理しすぎなんじゃないの？　顔色ひどいわよ？」

「そう、かな……？」

「ちゃんと休んでね？　あなたが倒れでもしたら、ゆきちゃんが泣いちゃう」

「……うん。ゆきちゃんが泣くのは、嫌だな」

「そうでしょ？」

クラスメイトの名を出されて素直に頷く紋を見て少し微笑ましい気分になる。紋と由紀ゆきの二人は傍から見ても姉妹のように仲が良い。由紀を悲しませたくないという気持ちはかなり強いのだろう。逆にそれだけ大事な由紀のためだからこそその今までの行動だったのだろうから、これで無茶をしなくなる、なんてことは残念ながらもなさそうだが。

悠里が少し遠い目になっていると、急に紋が激しく咳込み始める。

「……ああ、ゆきちゃん、泣いちゃうよね……嫌、だな……」

「ねえ、本当に大丈夫？」

続けて紋がひと際小さな声でつぶやいた一言は、強くなってきた雨と風の音にか

き消され、悠里の耳には届かなかった。

死にたくない、というその一言は。

スタンドちゃん視点だと本当に幽霊化できるのか半信半疑だろうし、そりゃ怖い。
だが次回で肉体を捨ててもらおう（無慈悲）

パート6 お別れ

作者はなんてひどいことをするんだと自分で思ったので初投稿です。

バリケードが崩れたぞー大変だー（すっとぼけ）

という訳で現在三階の廊下がゾンビクロニクル開幕寸前です。

三か所ある階段のバリケードの内崩れた一つに駆けつけて迫りくる“彼ら”を粉碎する作業が始まります。その中で無事スタンドちゃんが噛まれたら、お別れ告げたあと音楽プレーヤー爆音で再生しながら下に降りて“彼ら”を下に誘導したあと自分が“彼ら”化する前に自害すればOKです（ド畜生）

え？ 下校放送？ 雨なので電気が足りません（無慈悲）

どうやら真ん中の階段のところのバリケードが突破された様子。ではユクゾー！

（カーー！カーー！おつかー！！） あ、りーさんとゆき

ちゃんには消火器とか持って別のバリケードの様子見てきてもらいます。

バリケード跡地まで行ってみると、やはり“彼ら”がいっぱいいますね。しかしこっちにはシャベルゴリラと覚悟キメためぐねえと意外に強いチョーカーさんがいるんだよ！

……あれ？　これ噛まれる要素ある？

いや、きっと何かあるはずだ。

ほら、めぐねえが勢い余ってバリケードの残骸で躓いて転んだ！　その隙を見逃すハードコアモード“彼ら”ではない。

わーめぐねえあぶないー（棒読み）……って、いやマジであぶねえな！　飛び込んで庇うぞ！　うおおおおお間に合えええええ！（必死）

オラァ！（貧弱紳士タツクル）

ふう、何とかめぐねえは噛まれずに済んだぜ。めぐねえは（やり遂げた顔）「あやあああああああああああああ！」

くるみちゃん絶叫。まあ、そうなるな。でもその叫び声でいっぱい“彼ら”が集まってくるのでさっさと放送室に立てこもってくれる？

チョーカーさんは言葉も出ない様子。

そして一番ひどいのがめぐねえ。

【キャラ視点】

くらなみあや

幽波紋は、ここ数日で聞きなれた声の持ち主が悲鳴じみた絶叫をあげるのを聞いて、ようやく自分の行動の結果がどうなったのか認識する。

めぐねえ……佐倉慈さくらめぐみを助けることに成功したらしい。

「そ、そんなっ！ 私を庇って……？」

佐倉慈……失礼ながら、最初は少々頼りないところもあった。それでもすぐに唯一の大人として立ち上がり、これまで皆を導いて来てくれた。ここで彼女が居なくなつてはダメだ。そうなつたら学園生活部の運命は大きく変わってしまう。それも悪い方へ。

そんな恩師の震える声を背に、押し倒すようにした“彼”の首にスコップを突き刺す。力がないせいで少し時間がかかるので、これまではこんな攻撃の仕方とはとても出来なかったが、既に噛まれてしまった今では何も問題ない。

ぐつたりと動かなくなった“彼”から離れると、振り向いて仲間たちの様子を見てみる。

様々な表情を浮かべているが、そのどれもが衝撃と、遅れてきた悲しみに彩られている。こういう表情をしてくれるくらいには好かれていたようだと思いきや、自分がこれからどうなるのか考えて、心の奥から湧き上がってくる恐怖と未練に打ちのめされる。だが彼女らに縋りついて泣き叫んでいる場合ではない。こうしている間にもバリケードの崩落音を聞きつけた“彼ら”が次々と向かって来ようとしている。

「みんな……私が下の階に引きつけるから、放送室に戻って……あいつら、夜になつたらいなくなるから、バリケードも直せるとおもう」

「お前は!? それじゃあ、お前はどのようなんだよ!?」

「……もう、助からない」

「……っ!」

助からないと言ったところで慈の肩がビクリと跳ねる。紋を見つめる瞳は大きく見開かれて涙がこぼれ、口は酸欠を起こした金魚のように開閉を繰り返す。

「噛まれたせいじゃないよ。元々、もう、あと何日生きられるか分からなかったから」

苦笑するような顔でそう言って激しく咳込む紋を見て全員が押し黙る。ここ数日の紋がずっとそんな調子だったのは見ていたが、まさか死に至るほどの物などとは誰も思っていなかった。

「なんで、言ってくれなかったんだよ……」

「ごめん……本当に死んじゃうほどひどい物なのか、昨日くらいまで確信がなかったし、言ったらゆきちゃん、泣いちゃうかな……とか、いろいろ考えちゃって。怖くて、言えなかった」

恵飛須沢胡桃^{えびすざわくるみ}……ここ数日何度も共闘してすっかり打ち解けた仲間の泣きそうな顔に、胸が締め付けられるような想いを抱きながら答える。

「そう、なんだ……誰にも言えなくて、あたしたちも気づいてあげられなくて。辛かったよね……でもさ、そんな、犠牲になるみたいなお事しなくていいじゃん……先生は助けなくちゃいけなかったけどさ、何か他に方法はなかったの？」

柚村貴依^{ゆずむらたかえ}……クラスに居たときは、正直怖いと思っていた。しかしこの状況で一

緒になって、そんな印象は消えてなくなった。彼女は、どこまでも優しい子だ。

「嘘……あやちゃん……」

聞こえた声の先を見上げると、階段の上に若狭悠里^{わかさゆうり}が立ち尽くしていた。胡桃の大声を聞いてこちら側に駆けつけたらしい。

悠里には戦い以外で大いに助けられた。学園生活部の結成のきっかけも彼女だ。一つの集団として本当の意味で結束できたのは悠里のおかげといってもいいだろう。

その隣には、紋がいつでも見ていたい人物が、しかし決して見たくなかった表情を浮かべて震えている。

「先生、くるみちゃん、貴依ちゃん、りーさん……ゆきちゃん。今まで本当にありがとう」

丈槍由紀^{たけやゆき}……こんなことになる前からずっと一緒にいてくれた、大切な友達。彼女を死なせまいと必死になっていなければ、最初のあの日の時点で噛まれていただろう。由紀のことは、そして仲間たちのことは、何を賭しても守り抜く。今までも、これからも。

「離れても、ずっと一緒だよ」

そう言って学園生活部部員の証であるお守りを持ち上げて見せる。何かの意志に

突き動かされるように行った儀式で火をつけたはずだが、焦げた跡などは一切ない。お守りを見た皆が自分の持つている分を取り出し、握りしめる者や、胸に抱く者、動作は様々だったが、紋の言葉への返答を行動で示した。

それを見届けた紋は踵を返して階段を下りていく。背後から由紀の泣き叫ぶ声や、そんな由紀を無理にでも放送室へ連れようとする胡桃の声……どれも紋のことを想うが故の声が聞こえて涙が止まらなくなる。

その声をかき消すように、上着のポケットに入れてあった音楽プレーヤーの電源を入れ、小型スピーカーにつなぐと音量を最大にした。なぜこんなものをポケットに入れておこうと思ったのかは分からない。だが今の自分にはこれほどあって助かるものもない。何せ“彼ら”を引きつけないといけないというのにもう大声を出す力も、机等の金属部分を叩いて音を立てるような力もろくに残っていない。指先で軽く押すだけで爆音を垂れ流してくれるこの機械の存在に心から感謝する。

大音量で響き渡るのは、数日前に紋が由紀と一緒に聴いていた曲だ。曲名は表示されていないので分からない。その時のことを思い出して、下の階へと向かう足が重くなる。

——今すぐ戻りたい。

そう叫ぶ心の中の自分をねじ伏せて機械的に進んでいく。戻っても彼女らは受け入れてくれるだろう。だがすぐに紋は“彼ら”の仲間入りをして襲い掛かる。だから絶対に戻れない。

——怖い

続々と集まってくる“彼ら”との距離はギリギリだ。少しでも足が止まれば追いつかれて、誘導は失敗する。自分は無駄死に、仲間たちにも危険が及ぶ。だから絶対に止まらない。

——死にたくない

そんな当たり前のことがどうした。彼女らも、そして“彼ら”ですらそうだろう。だから絶対に、仲間だけは死なせない。

大勢の“彼ら”を引き連れて一階に到着した紋は、初日に屋上へ逃げてからずっと持っていたスコップの先を、初めて自分に、それも喉へと向ける。

「みんな……大好きだよ」

それが幽波紋の生涯最後の言葉だった。

次回からようやくタイトル通りになりますね。
予想外に長くなった（白目）

パート7 こころのきずあと

とうとう今回から幽霊モードなので初投稿です

こんばんは（産声）

ここから幽霊モード突入です。いやー、皆の行く先で“彼ら”を片っ端からオラし続ける無敵のスタープラチナとはいきませんでした。好感度の高い部員が足りなかったのでマジカルパワーも足りず、物理的干渉に制限がついています。周りにあるものをうまく利用するプレイングが必要になってきますね。

見た目に関してですが、マイナスフィートの影響を受ける前の状態に戻ります。隻眼も骨折で吊っていた腕も栄養状態最悪な貧弱ボディもすべて元通りの健康体なので誰だコイツって感じになってます。それでも一目でスタンドちゃんだとは分かる程度ですが。

さて、では“彼ら”が全く襲ってこない（幽霊なので存在自体ばれない）安全な

校舎内を悠々と移動して学園生活部の様子を見に行ってみましょう（ゲス顔）

三階についたぞ！（霧）

……うん、完全にお通夜モードですね。知ってた（諸悪の根源）

全員、涙を流しながら一言も発することなくうなだれています。ゆきちゃんに至っては精神ダメージが限界に達して倒れた様子。奥の方で寝かされていますね。

ここまで悲しんでくれるくらいの好感度は稼げていたようで一安心。

ちなみに仲間といえども霊感ない人に今のスタンドちゃんの姿は見えません。この空気の中で何事もなかったかのようにひょっこり化けて出たら全員別の意味でびっくりしそう（小並感）

このままながめてるのもいいですが、早いところバリケードを直してもらわないといけないので、疲労だけでも今のうちに癒してあげましょう。

幽霊モードで使えるコマンドの中には“周囲の仲間のゲージ回復”があります。回復量は大した事ありませんし、クールタイムもそんなに短くないので“彼ら”の目の前だとほぼ役に立ちませんが、こういう安全地帯では非常に有用です。ではス

タミナゲージを選択してちよつとずつ回復開始。

しばらくするとくるみちゃんが立ち上がってドアの外の様子を伺い始めました。「……よし、居ない。今ならバリケードを直しに行ける。動けるやつはついてきてくれ」

寝ているゆきちゃんを除く全員が立ち上がりますが、めぐねえだけはゆきちゃん
の傍についていてくれ、ということで行かれることになりました。めぐねえ
の精神状態は倒れたゆきちゃんの次にひどいのもうしばらく休ませておこうとい
う配慮でしょう。もちろん倒れたゆきちゃんを一人で放置しておけないという理由
も本当でしょうが。

めぐねえがゆきちゃんの近くに移動したのを見届けると残りの三人がそつと放送
室から出て中央階段のバリケードを修復し始めました。

物理干渉が自由にできる状態であればいくらでも手伝うのですが、あいにく無理
です。大人しく周囲を見回して“彼ら”が寄って来たら物音たてて知らせる仕事に
つきましよう。

作業に必要なことを言うとき以外、完全に沈黙した状態でひたすら手を動かす三

人を背景に、階段の下の方を警戒しながら、キャラメイク時にマイナスフィートをとったことによって手に入れた成長ポイントで幽霊コマンドを強化しましょう。スタンドちゃんはこのために虐待されたり、咳ばかりする貧弱ボディになったり、コミュ障になったりしたわけですね（鬼畜）

……先にゲージ回復を強化しとけばもうちょっと早くバリケード修復にとりかかってくれたのでは……？ まあ別にRTAしてるわけじゃないしいいか。

無事バリケードが直ったらすっぴん夜になっているので、皆放送室に戻って就寝。食事はとらないつもりそうですね。喉を通らないという奴です。

おはようございま〜す！

一夜明け、昨日の陰惨さからのギャップがひどい、晴れ渡る青空が広がっています。超いい天気。メンバーの顔は昨日と大差ありませんが。

……いえ、一人だけ天気と同様のギャップを見せているピンク色の子が。

「おはよう〜！ あやちゃん〜！」

あっ（察し）

【数日後の佐倉慈の手記】

私は罪を犯した。

いつかこれを読む人にそのことを知ってほしい。

あの子たちのことだ。

くらなみあや

幽波紋さん。あの子を失ったのは私のせいだ。

私は覚悟を決めたつもりでいた。生き残った生徒たちを守るために“彼ら”と戦うのだと誓ったはずだった。

でも、それだけで強くなれるなら苦労はしない。胡桃さんや貴依さん、そして紋さんの力を借りなければまともに“彼ら”の相手は出来なかった。

今思えば私は意固地になっていたのだろう。唯一の大人でありながら、守るべき生徒に戦わせて自分が下がる訳にはいかない、と。

特に、元々体が弱いうえに怪我をしていた紋さんが率先して戦っている様を見て

焦っていたのだろう。

その結果があゝの失態だ。

倒れたバリケードの残骸に足を取られて倒れた私を、彼女は迷わず庇ってくれた。その時私は、あろうことか安堵していた。彼女が犠牲になったことを悲しむより先に、自分が助かったことへの安堵が確かにあったのだ。

結局、私は生徒を守っているつもりで、彼女たちに縋っていただけだった。

私——ごめんなさ——（筆跡が乱れていて判読不能）

手の震えが何とか止まった。

続きを書かなくては。

紋さんを失った傷はあまりにも大きい。特に親友だったたけやゆき文檜由紀さんは、そのことに耐えきれず、自らの時間を止めてしまった。

私は彼女の笑顔を望んでいた。そうして学校生活の幻想を作り上げた。

由紀さんはその幻想の中で、紋さんと共に生きている。

こんなことが起きる前の、平和な日々の笑顔を取り戻した。

望んでいたはずの彼女の笑顔を見るたびに、胸が張り裂けそうになる。

全部、私のせいだ。

このノートが何になるのかは、まだわからない。でも、遺書にだけはするつもりはない。

時間の流れは止まらない。

いつか生徒たちがここを笑顔で出られるならば、私はどんなことでもする。

あの子たちを元気に送り出すこと。そして命の限り守り続けること。それが助けられた私の責任だ。

私は佐倉慈。私立巡ヶ丘学院高校の国語教師だ。

ゆきちゃん原作モードに突入&睡眠イベントでスタンドちゃんが持ってた霊視を

ゲット。スタンドちゃんのこと見えてるけど退行のせいで周りからはそれも幻覚だと思われるやつです。

そして今度こそめぐねえの覚悟が完全にキまりました。やることが変わるわけじゃないけどスタンドちゃんの命を無駄にしないために奮闘します。

パート 8 出張

新年めでたいので初投稿です

パート 8 だオラァ！

ゆきちゃんがこっち見てにこやかに話しかけてきましたね。どうやら霊視ゲットしちゃったようです。それと同時に“最近、学校が好きだ”状態になってしまったので周りからはすごい目で見られていますね。特にめぐねえが今にもぶっ倒れそうな表情になってます（愉悦）

そんな学園生活部を眺めながら数日過ごしていると、屋上の菜園の一角にどかい十字架が建てられました。原作のめぐねえの墓と同じものですね。違うのは白リボンとペンダントの代わりにお守りと黒いローブがかかっていること。これ雨の日すごいことにならん？ 原作のリボンもアレだしそもそも墓が木製だけでも。

実はこの数日の間にスタンドちゃんの抜け殻は回収されています。ゆきちゃんに

見せないように頑張っていたようなので運搬中に軽く注意を引いておきました。

それはそうとこれって畑にスタンドちゃん埋まってるんかな？ わざわざ持つ

て上がってきたということは多分埋めてるんだろぅけど腐敗でえらいことになりそう（小並感）

さてそんなこんなでゆきちゃんと授業（）を受けつつ17時くらいになるのを待ちます。

時間が近くなつて来たら原作六巻の椎子さんノート片手にラジオの周波数を操作しましょう。機械に干渉するコマンドがあるので間違えないように念をラジオに送ります。周波数は $76 \cdot 1 \text{ MHz}$ です。これがここ数日の日課。理由はもちろんアレ……よし！ 受信した！ 圭ちゃん救出ミッションの時間だ！

椎子さんノートにも書かれている通り、圭ちゃんの救援要請放送は同じ日に三回あるのみで、翌日以降はうんとすんとも言わなくなるので決して聞き逃してはならない（戒め）

無事受信できたので学園生活部メンバーの耳に入るように音量爆上げしなう。

……いい感じに聞き取ってくれました。駅に突撃するメンバーが素早く選定されます。その結果めぐねえとくるみちゃんが行くことに。ゆきちゃんとりーさんが行ってもしょうがないので留守番は当然として、留守番が居るなら戦闘員が全員出払うのはどうなのということでもチョコカーさんが部室警備員として残ることになりました。

ちなみにゆきちゃんには出張と言ってあるようです。

スタンドちゃんはどうするのかゆきちゃんにきかれるのでついて行くと行っておきましよう。留守番チームは放送室に静かに籠っててくれれば特に危険もなく、一日くらいなら放置していても大丈夫です。

しかし出張チームはそうもいきません。夕暮れ時で“彼ら”も若干動きが鈍り始めるとはいえ、狭い学校の廊下と違って四方八方から迫ってくるので、普通にバリケードやられた時と同じくらい危ないです。ほっといたら確実に噛まれるでしょう。

という訳で二人と一緒にイクゾー！ (ブブブブブブブブ)

！ カ

ーッ！ ブブブブブ

！

避難梯子のところから外の“彼ら”を観察して、何とかめぐねえの車のところまでたどり着く方法が無いかと二人で話し合っているのだ、スタンドちゃん一人ですっさと下に降りて遠いところの車へ接近。便利な機械干渉コマンドでヘッドライトを点灯しつつクラクションを鳴らします。これで“彼ら”はその車にわらわら集まってきて、めぐねえの車までの道が開けます。

二人とも今のうちにさっさと梯子降りて車乗ってホラ

しかし便利だな機械干渉。直にオラオラできなくなった今回のデータではこれがメインウェポンですね。

【キャラ視点】

恵飛須沢胡桃は、えびすざわくるみ佐倉慈車の助手席で地図を広げながら、先ほどからずっと感じている“何か”について考える。

その最も大きな原因は、これから駐車場に向かうかというタイミングで、狙ったようにライトやクラクションの誤作動を起こした、今乗っているのは別の車。駐車場まで到達したときにその車の方をチラリと見てみたが、人が乗っている様子はなかった。

つまりは本当に機械の誤作動なのだろうが、あまりにも都合が良すぎる。姿を見せない何者かの手によるものだと言われた方がまだ信じられる。

そもそも今回の“出張”のきっかけになったラジオ……あれは誰が電源を入れたのか。誰があの救助要請の放送に周波数を合わせたのか。

考えれば考えるほど疑問は膨らんでいく。

そうして考えていくうちに、思考は丈槍由紀たけやゆきの発言にたどり着く。

「めぐねえは出張かあ、先生って大変だよね。え？　くるみちゃんもついて行くんだ。あやちゃんも？」

由紀は数日前から、こんな事件など起きていないかのように振る舞っている。元々精神が参っていたところに親友の死が重なって限界を迎えてしまったのだろう。

死んだ親友、幽波紋くらなみあやの姿が見えているというのも、その死を受け入れられなかった心が作り出した幻なのだろう……と、胡桃は思っている。

確かに紋が生きていれば、この“出張”には絶対についてきただろうな……と、人の命がかかると異様なほど頑固になる仲間のことを思い出す。

（あのクラクションも、化けて出たあやの仕業だったかな……って、何考えてんだ

か。ありえないって……)

こんな考えが出てきてしまう辺り、由紀の心配をしている場合ではないかもしれないと苦笑していると、車載ラジオから再びあの放送が聞こえてくる。

文面は先ほどとほぼ同じ。つまり録音ではない。放送できるということはこの人物はまだ生きているということだ。

「……足を怪我してるって……急がないと」

慈がハンドルを握る手に力を込める。声からして放送主は女性、それも高校生くらいだ。もしかしたら巡ヶ丘高校の生徒かもしれない。

ここ数日の慈は傍から見ていてひどいものだったが、今はその目に光が戻っていた。生徒が生きているなら、これ以上は絶対に死なせないという決意が宿っている。その目は何となく紋を思い出させるもので……知らず知らずの内に紋を想起させるものを探していたことに気づいた胡桃は、やはり自分も由紀の心配をしている場合ではないな、と慈に見えないように再び苦笑した。

初日に先輩やっちゃってるからほんの少しだけ他の部員より余裕あるくるみちゃん。やはりゴリラか。

パート9 出張2

短くなってしまったので初投稿です。

ウェーイWWWW オタク君みてる〜？ パート9 始まります。

巡ヶ丘駅に到着しましたので、圭ちゃんが居る北口の駅長室に向かって進軍するくるみちゃんめぐねえのコンビを支援しましょう。

おっと、早速乗り場の方から大勢の“彼ら”が突撃してきました。

機械干涉発動！ 改札ラリアットをくらえー！ オラァ！（ソフト&ウェット）一斉に起動した自動改札機が次々と“彼ら”の膝を殴打！ 哀れ転倒した“彼ら”はまとめてくるみちゃんのシャベルめぐねえの鉄パイプの餌食DA！

「ふー、改札が生きてて助かった」

「そ、そうね……？」

狙ったような改札ラリアットに困惑しつつも殲滅を終えた二人は一息つくと駅長

室を目指して歩き出しました。機械干渉は便利ですが傍から見るとただの怪奇現象なので、今のところSAN値は減っていないものの、やはりなんとも言い難い感覚に襲われている様子。

だからって使用を控える気は無いゾー だってやらないと君ら嘯まれるんだもん
(この難易度選んだ奴の発言)

という訳でやってきました駅長室。めぐねえが呼びかけると、ドアをそっと開けて圭ちゃんが顔を出します。

訪れたのが制服着たくるみちゃんと学校で見覚えのあるめぐねえだと分かると、駅長室に入れてくれました。スタンドちゃん？ 見えてないので二人が入った時点でドア閉められます。強く生きる(すでに故人)

まあドアすり抜けるくらいじゃないですが(タケル殿並感)

駅長室に全員が入ると、圭ちゃんは脱力して座り込みます。まあ足怪我してるし仕方ないね。めぐねえが持ってた包帯で手当てし始めたので、それに合わせてこの間スキルポイントで強化された“味方ゲージ回復”を発動。相変わらず“彼ら”との戦闘中はアテにできない回復量とクールタイムですが、非戦闘時は本当に便利。

圭ちゃんの目にはめぐねえの手当てが神がかってるように見えそう（小並感）

ちなみにフル強化すると生物限定のクレイジーダイヤモンドみたいになります。大学編まで進んでその人々を武闘派含めて全員心の友にするくらいいいじゃないとそこまでは強化できませんが。つまりTASさん以外はチートでも使わなきゃほぼ無理。そしてチート使うならそもそもハイパームテキモードにでもしろという話で。クレイジーダイヤモンド化を通常プレイで狙うのは現実的じゃないです。

さて、めぐねえによる手当てが終わる頃には圭ちゃんも自分で歩いてほかの二人について行けるくらいには回復しました。車に乗り込めー！

そしてそのまま進路は駅前ショッピングモールへ。

……え、一旦帰らないの？（困惑）

【キャラ視点】

祠堂圭しどうけいは車の後部座席で揺られながら、すっかり痛みの引いた自分の足を不思議

そうに見つめる。優しそうな雰囲気さくらの教師——佐倉先生というらしい——が持ってきた包帯などを使って手当てをしてくれた時から、上手く動かせないほどの痛みが

徐々に和らいでいき、すぐに走るのは無理だが歩くくらいなら問題なくできるほどに回復した。

動けなかったのは思っていたよりも精神的な要因が大きく、助けてもらったことでそれが取り除かれたのだろうか？ それとも単に佐倉先生の手当てが上手かったのだろうか？

ともあれ、来てくれた彼女らのおかげで歩けるようになった。聞けばこのまま駅前のショッピングモールまで行って親友の美紀みきも助けてくれるという。

嬉しく思うと同時に少し気まずい気分にもなる。美紀にはショッピングモールを去るときに喧嘩別れ同然のやり取りしか交わせなかった。

出て行くこうとした自分を引き止めてくれた美紀の言葉は正しかった。一人で飛び出して出来たことはショッピングモールから出て、駅に逃げ込むこと……出て行く前と同じ、安全な部屋に籠って震えることだけだった。一人になってしまった分、むしろ悪化したと言える。唯一、駅長室にあった機材で助けを呼ぶことができた事だけは救いだったが。

助けてくれた彼女らは現在、巡ヶ丘高校を拠点にしているらしい。美紀と合流し

たら、まずは謝ろう。仲直り出来たら、また一緒に頑張ろう。

すぐに見えてきたショッピングモールを視界に収めながら、圭は決意を固めていた。

到着後、美紀の救出について行こうとしたら、怪我をしているのだから隠れて待っているように”と言われて決意の出鼻をくじかれたが。

遠足中止のお知らせ

パート 10 出張 3

12巻読んでふと“ スタンドちゃんこれ空気感染で発症しなくね？” となって愕然としているので初投稿です。

病弱フィートとハードコアモードのせいだということでゴリ押ししよう（苦し紛れ）

はいやってきましたみんな大好きショッピングモールウ！（ヤケクソ）
めぐねえとくるみちゃんの回復が万全ではありませんが、来ちゃったものは仕方ありません。最上階でみーくんが私は負けない宣言しながら“ 彼ら” 迫真のドアノックに完全敗北して布団かぶって震えてるはずなので、階段に直行するめぐねえについて行きましょう。

最上階までは特に何事もなく到達できますが、階段の先にはダンボールのバリケード。ここを超えるとみーくんの部屋のドアを叩く仕事に就いた“ 彼ら” との戦

闘が始まります。原作では即撤退して追いついてきたのを各個撃破していましたが、奥に人が居ると分かっている状況ではそうもいきませんので頑張って突破しましょう。

という訳でバリケードを素通りして廊下の様子を……居ますね（知ってた）

机一つ持ち上げられないクソザコ物理干涉でラップ音立てて、階段に背を向けるように誘導しておきましょう。ㇿㇿ（小声） お、いい感じに後ろ向いてくれま

した。ここでめぐねえと我らがシャベルゴリラのエントリーだ！ 哀れな“彼”の後頭部は涙目のルカめいて陥没！

流石に他の面々がシャベルの音に気づいて振り向きますので本格的に戦闘開始です。

駅では機械干涉が大活躍でしたが、ショッピングモール組の残したゴミの散乱しているこの場では普段ろくすつぽ役に立たない物理干涉が大活躍します。ちょっと押せば転がって容易に移動させられるビール瓶や空き缶がそこら中に設置されていますからね。めぐねえ達の方へ向かおうとする“彼ら”の進行ルートに瓶を転がしておけば勝手に踏んづけて転んでくれます。これはおまけだ！ とか言って酒を

たくさん持って上がってくれたリーダーに感謝……いやそもそも最上階のこの惨状はあいつの噛み傷隠しが発端だったわ。ファックキューリーダー（手のひらターボスマッサージャー）

あ、騒ぎを聞きつけてみーくんが部屋から出てきました。丁度くるみちゃん最後の“彼”の後頭部を涙目のルカにしたところを目撃してドン引きしてしまいが、巡ヶ丘の制服を着ていることに気づき警戒しながらも近寄って来たところをめぐねえが説得。

「ッ！ 圭が!？」

圭ちゃんの生存と、下で隠れて待っていることを伝えたところで説得は完了。

みーくんがなまになった！ 何とかなったぜ……（安堵）

しかし車に戻るまでがショッピングモールです（意味不明）

しっかりと三人パーティを守りましょう。ここで油断すると普通に一階あたりで囲まれて誰か噛まれたりします。囲まれた状態からみーくん救出した原作チーム優秀過ぎひん？

おっと、近寄って来ようとしてくる一団が居るのでスプリンクラで水ぶっかけ

て撃退しましょう。

「水が勝手に……設備が老朽化してたんでしょか？」

「……またかよ」

「また？」

「あー、いや……今のうちに行こう」

「え？ は、はい……」

相次ぐ都合のいい機械の誤作動。これにはくるみちゃんも苦笑い。みーくんは初見なので困惑。

そんなこんなでみーくん救出成功！ ほっと息をつくくるみちゃんとめぐねえ、車内の後部座席で再開を喜び合う圭ちゃんとみーくん、後部座席中央に座っているせいでその二人を体にめり込ませるスタンドちゃん。五人を乗せた車が学校へ向けて出発します。

ここまで来れば到着までは安心です。駅からショッピングモールに直行することになった時は想定外の事態に若干焦りましたが、もうこれ以上妙なことは起こらないでしょう。

この二人を加えた学園生活部を卒業まで守って――

「ストップ！」

突然興奮し大声を出したゴリラに驚いたためぐねえ、おもわず急ブレーキ。

何事じゃ……あ、そうか（納得）

遠足中止になったからここでもみるみちゃんの家の前通りかかるイベントが起こったのか。今回は“顔出して来たら？”と言ってくれるゆきちゃんが居ないので家に入るかどうかは分からないですね。

「びっくりした……急にどうしたの？」

「ごめん。ほら、この家さ……」

困惑するめぐねえの言葉に答えて家の表札を指さすくるみちゃん。表札に書いて

ある文字は“くらなみ幽波”

……おおん？（早速の想定外）

【キャラ視点】

なおきみき直樹美紀としどうけい祠堂圭は車に揺られながら、再会した親友の手を握り語り合う。

「美紀、あの時はごめんね。私、あんなこと言って飛び出しといて……すぐに怪我しちゃって、それで駅に籠ってたんだ。先生たちが来てくれなかったら、きつと……一人じゃただ生きてることすら難しいんだって、思い知らされて、怖くて。せっかく美紀と一緒にだったのに離れちゃって、すごく後悔した」

そして、自分が離れたことで、親友を同じく「一人」という状況に追い込んでしまった。自分が味わった不安と恐怖。それがそのまま美紀にも降りかかったことは、今なら容易に想像できる。

「ううん……生きてればそれでいいのって、いいわけなかった。一人になったとたん、何もかも辛くなって、もういやだ、って……あの時、圭を止めることも、追いかけることも……何もできなくて、すごく後悔した。行動できた圭はすごいよ。おかげで助けを呼べたんだから」

一人で居る不安に耐えかね、癇癇を起して叫んだあげく“彼ら”を呼び寄せたことを思い出して、もうこの手を二度とはなすものかとばかりに、ぎゅっと握りしめる。

二人は自分たちの間にどこか暖かい空気が流れているように感じた。寒い季節で

はないとはいえ、夜はそれなりに気温が下がる。実際、窓の側は若干寒い。単にお互いの体温を感じ取っているというのもあるのだろうが、それ以上にもう一人ではないという安心感から来るものが大きいのだろう。二人はその暖かさを求めるように距離を詰め、見つめ合い、笑いあった。

「気まずい……たすけてゆきちゃん」

まさか見えざる存在が自分たちに挟まれて微妙な表情を浮かべているなどとは、夢にも思っていなかった。

家庭訪問の時間だオラァ！

パート 11 家庭訪問

なんかうまく書けずにいつもの二倍かかったので初投稿です。

想定外に次ぐ想定外で正直困惑しております。パート 11、はーじまーるよー！知らないはずのスタンドちゃんの家の前を偶然通りかかるとかどんな確率だよめぐねえ。まあそういう隠しイベントなのでしょうが。

キャラ作成時に取った虐待フィートがこの家の光景にも反映されてたらえらいことになりそうで今から嫌な予感全開ですが。

「何かあったら合図して。すぐに戻るわ」

「分かりました……気をつけてくださいね」

おっと、めぐねえとくるみちゃんやみーくんと圭ちゃんを留守番に残し、果敢に突撃していきました。まず呼び鈴を鳴らそうとして停電のせいか、はたまたぶっ壊れているのか、鳴らないことを確認すると玄関のドア（未施錠）をゆっくり開けて

誰かいなかと呼びかけ、その声に返事が無いのでそのまま侵入。

スタンドちゃんもそれに続こうと……したところ、玄関の前で立ち止まって首を横に振り、それ以上進もうとしてくれません。

……もう一回試してみよう……ガッデム！ やっぱり入ってくれません。原作のくるみちゃんの家の惨状からしてどの家にも“彼ら”が居る可能性は十分あり、この難易度での完全放置は怖い。流石に中がモンスターハウス状態ということはないと思いますが。

音を立てて呼び戻すか、と思いましたが、留守番組が何もないのに合図出したと思われそうなので却下。スタンドちゃんが家に入れないことにはしゃないのです、家の周りをグルグル回りながら警備だけして、後は中に危険が無いことを祈りましょう（諦め）

【キャラ視点】

めぐみ くるみ

くらなみあや

慈は胡桃と共に幽波紋の暮らしていた家を探索し始める。一応、奇跡的に同じ苗字の家だという可能性は考えたが、紋の住所はこの辺りだったはずだし、何より靴

入れの上に飾られていた写真に幼い日の紋と思しき少女が写っていたことで、ここが彼女の家だと確信した。

写真の中の紋は両親に挟まれて無邪気に、屈託なく笑っていた。最近の紋に会っていないければ、この少女の目の下に隈ができたところなど想像できない健康的な姿で、当然折れた腕を吊ってなどいないし、眼帯などつけていない。巡ヶ丘高校でいつも身に纏っていたあの黒いローブをこの紋が着ていたら、あまりの違和感に誰もが首を捻ることだろう。

写真たては埃をかぶっており、相当長い間指一本触れられていないことが分かる。写真の中で笑いあっている家族の誰一人として、視界にも入れていなかったかのように。

慈は写真たての埃を指で軽く掃うと、近くの部屋をのぞき込む。そこは居間のようで、数人が一緒に食事をとれる大きさのテーブルが鎮座し、奥はキッチンになっている。事件の影響か、荒れ果ててさえいなければ一般的な家族の平和なひと時が想像できる空間だった。

家の奥に進むとほかにもいくつかの部屋があった。そのうちの一つをのぞき込む

と、そこは紋の母親の寝室だったことがうかがえる。居間同様に荒れてしまっており、ここで安心して眠ることは出来なさそうだ。

「……この部屋」

次の部屋に入ると、そこには勉強机や巡ヶ丘高校の女子制服——予備だろうか？

——などが確認できた。十中八九、紋の部屋だろう。

なにも乗っていない勉強机の引き出しが少し開いており、一冊のノートが入っているのが目に入った。

慈はそのノートを手に取ってみる。どうやら日記のようだ。人の日記を勝手に見るなど、普段の慈であれば決してやらないことだ。しかし居なくなってしまった大切な生徒の生前の様子が記されたもの。学校での紋の様子は事件前からずっと見てきたが、思えば学校の外の様子はほとんど知らなかったことに気づき、家での彼女がどんな日々を送っていたのか、どうしても知りたいと思ってしまった。知ったところで彼女が帰ってくるわけではないし、そもそも学校でのことしか書いていないかもしれない。だが慈は少しでも紋に関することを記憶に刻んでおきたかった。そうすれば、彼女の存在がより強く心の中に根付いてくれる気がしたのだ。

慈は一言、ごめんなさいね、と呟いてノートのページを開いた。

開いて、心の底から後悔した。

「なに、これ……」

ノートを持つ手が震える……いや、手だけではない。全身が真冬の冷氣にあてられたように、立っていられるのが不思議なほどに震えている。だというのに全身から汗が噴き出す。

ノートの内容は日記に間違いない。数年前、慈と知り合う前の紋のことが書かれている。だがその内容は思い出というにはあまりにおぞましいものだった。

○月○日

今日もお父さんにたくさん殴られた。お母さんはたくさん泣いてた。

最近、だんだん右の目が見えなくなってきた。殴られた時にどうにかなっちゃったのかもしれない。

このことをお母さんに話したら、またたくさん泣いてた。

このままじゃいけないのはわかるけど、どうすればいいのか分からない。

幽霊が見えるのって、そんなに悪いことなのかな？

○月○日

家に変な格好の人達が来た。お母さんが呼んだみたい。

宗教とかじゃないって言ってたけど、クラウドとかなんとか、言ってることはよくわからなかった。雲？

幽霊が見えるって話をしたら、真っ黒な表紙の本を置いて行つた。

○月○日

クラウドの人が置いて行つた本を読んでみた。

黒魔術？　というものらしい。

わざと難しい書き方をしてるみたいで、読みにくい。

今日読んだところには力の強い幽霊になるやり方が書いてあった。あの人達、やっぱり変な人だな。

「めぐねえ？」

慈の様子がおかしいことに気づいた胡桃が語り掛けるが、返事は無い。

○月○日

呪いのやり方が書いてあるページを見つけた。

正直効くとは思ってないけど、試してみようと思う、

それから数週間、紋が四苦八苦しながら父親に呪いをかけ続ける様が記録されて
いる。

○月○日

また殴られた。

でもいつもより気が重くない。

効く訳がないって分かっているけど、呪いで仕返ししてる気分になってるからかな
？

この日記が見つからないかがちょっとだけ心配。

次のページをめくろうとする度に軽い吐き気を覚え、呼吸が荒くなっていく。

胡桃が声を大きくして再度語り掛けてきているのは分かるが、耳がその内容を聞き取ってくれない。

慈には数ページ先に何を書いてあるのか、この時点で分かっちゃっていた。何故なら慈の知る幽波家の家族構成は……

○月○日

お父さんが死んだ。お母さんは泣かなかった。

死因はお医者さんにも分からなかったらしい。

きつと呪いのせいだ。本当に効くなんて思ってた。

わたしがころした

持っていたノートが手から滑り落ちて床に当たり、大きな音を立てる。

胡桃が拾い上げようとすると、鬼気迫る表情の慈がその腕を掴んで制止した。

「め、めぐねえ？ 本当にどうしたんだよ……？」

慈はその問いに答えられず、ただ震えながら首をゆっくり横に振ることしかできなかった。

しかし胡桃にはそれだけで、そのノートの内容が見るべきでない物だということ

は伝わったようだ。

「あいつ……家庭事情、複雑そうだったもんな」

「……ええ」

過去の紋が本当に父親を呪い殺したなどとは思っていない。だが少なくとも慈と出会った時、紋本人は親殺しの罪の意識を背負って生きていた。

慈はそっとノートを引き出しに戻すと、ごめんなさい、と再度呟いた。

その謝罪が何に対してのものなのか、慈自身にも分からなかった。

ちなみに最後のごめんなさいは外うろついてるスタンドちゃんに聞こえてたりする。警備のために聞き耳たてまくってるからね。仕方ないね。

パート 12 しんにゅうぶいん!

なんとか生き返ったので初投稿です。お待たせしました。

失踪したかと思った!! 正直自分でもそう思ってた!

しかし最近突然、なんかいける気がする(最低最悪の魔王) ってたので早速
パート 12 に入ります。

前回、外をうろついてたら家の中のめぐねえに謝られました。スタンドちゃんの
黒歴史ノートでも見つけたかな? (名推理)

くるみちゃんはスタンドちゃんの写真を一枚持って出てきましたね。遺影にする
つもりでしょうか。

では車に戻って再びみーくと圭ちゃんを左右からめり込ませながら学校へ向か
います。

そして何事もなく到着! いやー、なんか三か月くらいぶりに帰ってきた気が

しますね。実際は全然そんなこと無いはずなのに不思議ですね。（すっとぼけ）

三階に上がって留守番組に暖かく出迎えてもらったところでようやくほっと一息。

スタンドちゃんに話しかけるゆきちゃんを怪訝な顔で眺めるみーくんに小声で事情説明するのを横目に、ここで新能力の開放をしていきましょう。

そもそもスタンドちゃんとの面識がないので好感度もへったくれない状態とはいえ、部員が二人増えたのはデカイ。ゲージ回復がレベルアップするとともに、常在効果でメンバーの空気感染を完全に防げるようになりました。流石に噛まれたら防ぎきれませんが、ほんのちょっと発症を抑えることができます。その間に葉か“水”をとってきてもらいましょう。そして物理干渉もレベルアップ！ 物に触れていられる時間が少々伸びました。

能力強化が終わったので、景気づけにゲージ回復を全種類かましておきましょう。誰も疲労してないのでスタミナは無意味ですが、こういうのって試し撃ちしたくなりますよね。ならない？

HP に関しては圭ちゃんがまだ片足負傷状態なので、クールタイムが終わり次第

すかさず範囲回復をかけ続けていきましょう。ドララァ！（貧弱クレイジード）
そんなこんなで新入部員二人を迎えた学園生活部を見守ること数日、そろそろ何かイベントが起こるかな、などと思っていたらワクワクした様子のゆきちゃんが二年生教室のスライドドアをフルオープン。

家計簿つけてたりーさんとみーくんが同時に振り返ります。くるみちゃんは最初からドアの方見てた様子。常に警戒する癖ついてんなこのゴリラ。

「肝試しやろ、肝試し！」

は？ 幽霊の目の前でなにやってんだこいつ（AA略）

まあ肝試し自体は原作にもあるイベントなので仕方ないけども。

「あれ？ あやちゃん、もしかしてお化け苦手？」

H A H A H A！ ナイスジョーク！

「あら、いいじゃない」

「でしょ？」

原作通りにりーさんからのゴーサインが出たところで、嬉しそうにめぐねえのところに報告に走っていきましたね。まあ今回はめぐねえが実在しますが。あと生

きた部員も三人ほど多い。

この大所帯なら物資回収もはかどりそうですね。

【キャラ視点】

「いいのか？」

由紀が教室を出て行ったのを見届け、胡桃が悠里に問う。

「ゆきちゃん？　気をつけてれば大丈夫よ。それに……せっかく部員が増えたんだから。早く打ち解けるのにこういうイベントは結構いいのよ」

「それ普通本人の前で言うか？」

二人の視線の先には最近“出張組”が連れ帰ってきた片割れの美紀が居心地の悪そうな顔で俯いている。

「こんなこと、してていいんでしょうか」

「なんだ、お化け苦手なのか？」

「ち、違いますっ！　そんなの信じてません！　ただ……」

「ただ、どうしたの？」

「不安なんです。先のことが見えないと」

そう言って美紀は膝の上で拳をぎゅっと握りしめる。

ここには電気がある。水も出る。物資も購買部を探せばまだ手に入るだろう。そんな環境にあって、なんでもできるのに、ショッピングモールに籠っていた時と同じことしかできていない。先のことが見えてこない。

「同じ日々が続いていると、あの時みたいに、いつか全部燃えてなくなってしまうんじゃないかって」

生き残った人々と必死に今だけを過ぎ続けた結果、誰かが“発症”してそれまでの日々が崩壊し、最後に残った圭すら出て行き、狭い部屋の中一人で怯え続ける羽目になった事を思い出して身震いする。もうあんなのは二度と御免だった。

今がどれだけ恵まれていても、そこから何も変化しないなんてことはありえない。必ず何かが変わっていく。どう足掻いたって変わってしまうのなら、せめていい方向に。だから先のことを考える。かといってそう簡単にいい考えが浮かぶわけでもなく、ただ不安だけが大きくなっていく。

「そう……」

そっと目を閉じて美紀の言葉を受け止めていた悠里がふっと微笑む。

「これから一緒に考えていきましょう。一人で不安がってるくらいなら……私達、一応先輩なんだから。少しくらい頼ってくれていいのよ？」

「先生のめぐねえもいるしな」

「っ！　ありがとうございます」

悠里につられて美紀も微笑む。もう一人じゃない。仲間が何人もいる。ほとんど詰んだ状態からスタート地点まで戻ってこれたのだ。

「しかし、先の事か。確かに、そろそろ考えなきゃだよな」

「そうね。私も留守番中、ゆきちゃんに訊かれたの。卒業したらどうするのかって」「卒業、ですか？」

「そう。就職か、進学か、って。美紀さんはどう思うかしら？」

「この状況で何を……あっ」

ここで美紀も気づく。この学校のように生き残った人が居る場所。例えば大学や企業などの大きな建物は設備が生きている可能性が高い。そうなれば人は集まるだろうし、外部への連絡手段なんかも手に入るかもしれない。もしかしたら救助が来ることになっている場所だってあるかもしれないのだ。

「ゆき先輩……ちゃんと考えてるんですね」

初対面で「みーくんとけーくんでミケだね！」などと言われたり、単なる不思議ちゃんだと思っていたが、それは理由があってわざとやっているだけで、本当は案外思慮深い人なのかもしれない。

「いや、あれが素だ」

即座に否定された。

「そ、そうですか……あ、ゆき先輩といえば」

「どうした？」

少し訊きにくそうにしながらも、これは訊いておいた方がいいだろうと口を開く。
「その……」 あやちゃん “ っ て、 どういう人だったんですか？ 」

その質問に悠里と胡桃は一瞬だけ目を見開いた後、ゆっくりと思い出すように語り出した。

次回、マジモンの幽霊が後ろからついて来る肝試し編、はーじまーるよー！

パート13 きもだめし! 1

短いですが復活時のノリを維持するために初投稿です

さあ始まりました、みんな大好き肝試し（嫌いな人だっている）

「きつもだつめし、きつもだつめし」

「ちよっとは緊張しろよ」

「ゆきちゃんは怖くないの？」

「うーん、本物のお化けに会ったら怖いかな」

ゆきちゃん、隣見てみ？

と、そんな感じで、緊張気味な他のメンバーと対照的にご機嫌なゆきちゃんの声を背景に二階まで降りてくると、偵察に出ていたためぐねえの姿が。

「みんな揃ってるわね」

「はーい……」

「肝試しもいいけど無茶しないでね」

原作の幻影めぐねえと同じ事言ってますね。そしてこれまた原作通りに全員で行こうという流れになるかと思いきや、人数が多いせいか二組に分かれることに。

まあ確かにあまり多人数でぞろぞろ行くのは目立ちまくってよろしくないけど、別行動はゲーム的にもっとよろしくない。片方しか守れんやんけ！

「じゃあ私とめぐねえ、圭^{けい}さんと貴依^{たかえ}さんは美術室と家庭科室。くるみとゆきちゃん、美紀^{みき}さん、あやちゃんは購買部と図書室。みんなで何か証拠の品を取ってくるのよ。もしはぐれたら声を出さずにこの階段まで戻ること。いい？」

という感じで、このイベントは例えめぐねえが居てもりーさんが仕切ってしまう様子。見えてないスタンドちゃんの割り振りもちゃんとする部長の鑑。めぐねえの頭上に“←顧問”の文字が見える見える……

さて、分かれてしまったものはないので、守れない組は囁まれないことを祈りましょう。守れる組ですが、購買部は特にいうことは無いです。原作と違うのはりーさんが居ないのでレジに代金おいて行くのがくるみちゃんになったくらいでしょうか。

問題は図書室です。原作で“居残り生徒”が出てきてますからね。到着してすぐ警備の体勢に入ったくるみちゃんと別れ、残ったゆきちゃんとみーくんが本棚の探索を始めるのを眺めながらこちらも周辺警戒に努めましょう。

【キャラ視点】

「みーくんは何の本もっていくの?」

「そうですね……心理学とか、英語の本とか、もしあればサバイバルの本とか……」
美紀は周囲を警戒しながらも懐中電灯を使ってプレートを照らし、目的の本棚を探っていく。

「おお、たくさん……本好きなんだ」

「まあ、どちらかといえば。ゆき先輩はどんな本を?」

「うーん、マンガかな!」

「そうですか……」

そういえば生徒のリクエストに応じて蔵書を増やす制度がある関係で、娯楽用のマンガで埋め尽くされることになった棚もどこかにあったな、という情報を思い出す。確かあのあたりだっただろうかと視線を漂わせていると由紀が虚空に向かつて

何事か話しかけ始めた。

「あやちゃんは何の本にするの？」

美紀が学園生活部に来る前には“あやちゃん”という生徒が居たらしい。顔は知っている。ショッピングモールから学校へ向かう道中、立ち寄った家から胡桃が写真を持ちだしたのを見せてもらったからだ。人となりというか、学園生活部の面々からどう見られていたかも聞いた。皆がその死を受け入れられずに打ちのめされたという。

それから由紀がこんな風になってしまったらしい。

既にはないはずの“あやちゃん”との会話を続ける由紀の方をもう一度見る。

「あ、かばん忘れたんだっけ？ うん、一緒に入れとくね」

「……!？」

美紀は思わず自分の目をこすった。見間違いでなければ、由紀が何者かから本を受け取ってかばんに仕舞っている。

（え、いま本が宙に浮いて……!？）

「どしたのみーくん、目に埃とか入っちゃった？」

「い、いえ。なんでもないです」

慌てて手をひらひら振って取り繕う。

(気のせい……だよね)

由紀に“あやちゃん”が見えているという話の時、オカルト的な意味かと問うてみたのを思い出す。その時は否定されたが。

そういうことを考え出すと、次はあのショッピングモールを抜け出す際、スプリンクラーが誤作動した時に胡桃が呟いた“またかよ”という言葉が頭をよぎる。その場では濁されたが、後で訊いてみればあんな都合のいい“偶然”が何度も起こったということらしい。

(心霊現象を科学的に解説した本とか置いてるかな……)

ここ数日でいろんなことが立て続けに起こって疲れているのか、はたまた肝試しという特殊な状況でそういう思考になりやすいのか、美紀は普段ならあまり読もうとは思わないであろう本を探し始めた。

みーくん、S A N チェックです（満面の笑み）

パート13b 一方その頃

ゲーム風パートが無いので初投稿です

【キャラ視点】

「おーよしよし、飼い主とはぐれちゃったのかな？」

「その子大丈夫？ 噛まれた跡とか」

「えっと……うん、大丈夫みたいです。首輪の跡はありますけど」

「なら大丈夫かな」

「ていうか、犬も危ないんですかね？」

「わかんないけど、念のためにね？」

貴依たかえは圭けいがえへへと笑いながら抱きしめる、白と茶色の毛玉をじっと見つめる。

どこからどうやって学校の二階に迷い込んだのかは全く不明だが、尻尾を振り乱しながら貴依の方を見つめ返して来るその姿は紛う事なき“子犬”であった。

「食べ物でも探してたのかね」

今、彼女たちが居るのは学生食堂を兼ねた調理実習用家庭科室。慈めぐみと悠里ゆうりはひとつ手前の被服実習用の家庭科室にいる。なにやら大事な話があるとかで、何かあればすぐに撤退することを前提に貴依達を先に行かせたのである。

「これは“何かあった”うちに入り……ますかね？」

「うーん、特に危険な訳じゃないし、あっちの話が終わるの待ってていいんじゃない？」

「じゃあその間に使えそうなもの探しときましようか。よしよし、一緒に探そうね」

「ずっと抱えとく気？　まあ、放して変なところに行かれても困るけど」

急に吠えて“彼ら”を呼び寄せたりしないかとやや不安ではあったが、動物の癒し効果というのはよく言われていることだ。実際、満面の笑みで抱きしめている圭はもちろん、見ているだけの貴依も結構癒されている。部で飼うかどうか、他の面々とよく話し合う必要があるだろうな、と考えながら貴依は圭を追って探索を始めた。

「それにしても、大事な話ねえ……予想はつくけど」

“留守番”の最中、三階で出来ることは無いかと考えていた悠里が職員室に赴いたことを思い出し、ため息をつく。あの後、少しの間だけ様子がおかしかったので、職員室で何かを見たのかもしれない。傍に由紀^{ゆき}がずっと居たとはいえ、自分に相談してくれなかったことは、ほんのちょっとだけ寂しかった。

「これ、は……」

慈は悠里に渡された冊子を食い入るように見つめる。題名は“職員用緊急避難マニュアル”

巡ヶ丘高校の見取り図や緊急連絡先に関しては、製薬会社が指定されていること以外、普通の避難マニュアルのように思える。

問題はその手前のページだ。

マニュアルで想定されていたのは地震や火災などではなく、まさに今この状況

だったのだ。つまりこれを作った者は、このフィクションとしか思えない異常な状況が“実際に起こりうる事態”であると認識していたという事になる。

しかもご丁寧にとこの組織が研究をしている所謂“細菌兵器”の例が列举されていた。

「……」

マニユアルそのものではなく、内容を見たことで驚愕し、半ば思考停止して黙り込む慈を見て、悠里は心の中に少しだけあった疑惑が完全に晴れた事に胸を撫で下ろす。

慈が最初からこのことを知っていたのではないか……つまり“そちら側”の人間だったのではないかという疑惑だ。

とはいえ、マニユアルを開封したのは悠里だ。こんな狂ったものを何冊も用意して誰かの目につく確率を上げるとは考えにくい。それに今まで自分たちを必死に守ってくれ、紋あやの死によって由紀に次いで強いショックを受けていたあの姿が演技だったなどとは思えなかったため、それほど強く疑っていたわけではない。だからこそ二人きりでこのマニユアルを見せたのだ。

本気で疑っていたのなら全員で取り囲むか、せめて胡桃や貴依のような戦える仲間くらいは傍にいてもらう。

「私の……せいだ。私がちゃんと、これを見てれば……紋さんは……」

助かったかもしれないのに、と慈が幽鬼のようなかすれた声でつぶやく。どうやら中身までは知らなかったが、マニュアルの存在自体は認知していたらしい。マニュアルには学校の地下に避難施設が設けられていること、そしてそこに感染症を想定した薬が用意されていることが記載されていた。

もし早い段階でこの事を知れていれば。薬とやらを取りに行けていれば。あの時、紋を死なせることは無かったのではないかと、悔やんでも悔やみきれないのだろう。

放っておいたら自害でもしそうな表情になった慈を、悠里は思わず抱きしめていた。

「ゆうり、さん……?」

「めぐねえのせいじゃ、ない」

確かにあの日以前にこのことを知れていれば、とは悠里も思った。しかし三階に

いても危険な目に遭っていたようなあの頃の状況で、無事に地下までたどり着けたとは思えない。おそらく、いや確実に、犠牲者が増えるだけの結果に終わっただろう。見ていなかったことで事態はむしろマシになったという見方もできる。

だからと言って心が軽くなる訳ではない。こんなものを見せれば慈がこうなってしまうのは簡単に予想できた。まずは地図の部分だけを切り取って見せるといったことも出来たはずだ。だが悠里は少しだけとはいえ、慈のことを疑ってしまっていたのだ。確かめずにはいられなかった。

「めぐねえの優しさに甘えて、辛いことばかり押し付けて……駄目な部長で、ごめんなさい」

そんな悠里を慈はそっと抱きしめ返してくれる。どこまでも生徒想いで優しい心の持ち主を信じきれなかった弱い自分が不甲斐なくて、悠里は泣いた。

太郎丸生きとったんかワレえ！

そしてプレイヤーのあずかり知らぬところで地下室フラグ発生です。

書く前から分かってたことですが雨の日以来めぐねえのストレスがマッハですね
(ゲス顔)

パート 14 おてがみ

ほぼ完全に失踪した後の投稿なので初投稿です。

お久しぶりです（土下座）

肝試し編の続きですがね、録画データが吹っ飛びました（約10か月かけてもうまく書けなかったのでカットすることに決めたの意）

あの後には居残り君を遠目に見かけて、オカルト本を探し始めたみーくんが気付かずそっちの方に行ったので慌ててゆきちゃんに警告を発してもらってゴリラ警備ゾーンへ連行、事なきを得ましてそのまま帰還。

次の日の朝から再スタートとなります。

という訳で、おはようございま〜す（復活の鳴き声）

「ね、この子飼お？」

朝っぱらからゆきちゃんがそう言いながら抱きかかえる白と茶色の毛玉。まごう

事なき太郎丸たろうまるです。生きていたのかあ！（九十九遊馬）

昨日の肝試しで別班が拾ってきて今朝までは一応の警戒という事で別室に隔離されていたそう。噛まれた跡もなく、発症の気配もナシ。晴れて釈放となったようです。判断が早い！（逆天狗面）って思わないでもないですが、まあ感染してたら一晩で発症とまではいかなくても何かしらの異変がありそうなもので多分大丈夫でしょう。

飼い主が見つかるまで保護という体で（見つかるとは言っていない）学園生活部で飼うことになり、便宜上の名前（一生これ）も無事“太郎丸”と決まりました。もちろんゆきちゃんのゴリ押しである。

ひとしきり部の皆に抱きかかえられよしよされた太郎丸。最後に残ったみーくんがしゃがみ込んで呼びかけるも、太郎丸、華麗にこれをスルー。

「太郎丸ー、るー、るう」

「……元氣出しなよ」

「……はい」

そうしてみーくんに精神ダメージを与えた後……いやマジでゲージ減ってんじゃ

ん（ドン引き）回復させとこ……で、みーくんを指一本触れずに打ちのめした太郎丸が向かった先は再びゆきちゃん……ではなく隣のスタンドちゃん。貴様、見ているなッ!？（ジョジョ立ち）

これが野生の勘ですか。とりあえず抱き上げるほど長く物理干渉は出来ないの
で、そのまま撫でてあげましょう。

満足気な顔で部室内を探検しだした太郎丸をみーくん以外ほっこりした顔で眺めて癒されました。やはりアニマルセラピーって偉大だと思うの。

その後は肝試しの時拾ってきた風船やらなにやらを使って手紙を飛ばすという事になりました。本来みーくん来る前にやるイベントだと思うんですが。あとこれをやると後々ヘリが落ちて来て火事になるので正直あんまりやりたくない。だが拒否は許されない。ゆきちゃんと並んであれこれ書き込んでいきましょう。

メンバーが多いのでゆきちゃんの書いた部員集合イラストがものすごい大所帯になってますね。

めぐねえとりーさんが学校の位置情報やら状況やらをまとめ、残りのみーくんと圭ちゃん、チョーカーさんはくるみちゃん監修の元で“彼ら”への対処法や習性な

どを大雑把にまとめたものをそれぞれ作成。拾った人の生存率が少しでも上がるように、とのこと。

それぞれ書き終わったら飛ばすために風船とヘリウムの準備、および鳩の捕獲が始まります。

鳩を罠を使わずに捕獲するのはあのシャベルゴリラでさえ苦戦する高難度を誇りますが、姿も気配もない幽霊なら実にあっさり……あっ（雑魚）　こいつ気づきやがった！　ヤバイ、野生の勘ヤバイ。

結局、直接鳩を捕まえることはかなわず、素直にくるみちゃんが例の原始的な罠を用意するのを待つことに（完全敗北）

無事アルノー・鳩錦の足に手紙が括り付けられたところで空に向かって一斉に放流！　シュー手紙。ウェルカムヘリ爆弾。ファツキン！

【キャラ視点】

手紙が風船や鳩に運ばれて飛び去って行くのを見届けた後、美紀^{みき}は一人屋上に残って園芸部ゾーンの一角にしゃがみ込んでいた。

「こんにちは、^{くらなみ}幽波先輩」

言いながら手を合わせ、しばし黙祷を捧げた後で目を開き、菜園という場に似つかわしくない大きな十字架を見つめる。生存上重要な食料源たる菜園のブロックひとつをまとめて潰してまで確保された墓からは、学園生活部における幽波紋くらなみあやの立ち位置や、他のメンバーから向けられている想いの強さがうかがえる。

美紀からすると、言葉を交わしたこともない相手のことなのでその感覚は、まだよくわからない。だがもしこの下に眠るのが知っている誰か、それも仲のいい……例えば圭けいだったならば、と想像して、そうになったらやはり自分もこういったものを作っただろうな、と納得した。

生き残るというだけなら死んだ人間に構っている暇など無く、この場所は元の菜園として使った方が生存率の向上は望めるのかもしれないが、美紀だって骨の髄まで合理性に支配されてなどいない。そんな冷酷な考えを頭の中に居座らせるつもりはなく、すぐにかき消して再び黙祷を捧げた。

目を開いた所でこの場に眠る紋という人物について思いを馳せる。より具体的にはショッピングモールから脱出する際の不思議な機械の誤作動に始まり、先日のは試しでの所謂本ポルター宙ガイスト事件浮まで続いている不可解な現象の数々と、その一

部における由紀ゆきのまるでそこに紋という人物がいるかのような振る舞い。

特に例の本の件など、由紀が宙に浮いた本を受け取る光景を目撃してしまった。すぐに見間違いだと頭の中では否定したが、あまりにもはつきりと見えたあの光景は、思わずオカルト関連の本に手を伸ばすくらい鮮明に頭の中に居座ってしまった。

「先輩は、事件が起こる前からゆき先輩と仲良しだったって聞きました」

あの時手を伸ばした本で目に留まったのは守護霊という概念。死後も現世にとどまり、子孫だったり、生き残った大切な人だったり、そういった相手に寄り添って守り、導く。そんなやさしい亡霊の概念だった。宗教か、そうでなければファンタジーやメルヘンの領域の話ではあったが、どうせ今この現実がフィクションそのままの状況に陥っているのだと、意外とすんなり受け入れられた。

「こんな発想、正直自分でもどうかと思いますけど。でも、もしあなたが今もゆき先輩や部の仲間たちの傍にいてくれて、あの時も助けてくれたんだとしたら、お礼を言わなきゃって思ってる。その……ありがとうございました」

ぺこりと頭を下げて、こんなところ、普段の美紀を知る圭が見たらどういう反応をするだろうか、と顔が赤くなるのを感じるが、墓に向けて語り掛けるくらいなら

別にどうとも思われないか、と思い直す。

「できれば、これからもよろしくお願いします。何も返せませんが、きっと、私達にはこれからも助けが必要です」

図々しいかな、と思いながらそう言って頭を上げると、木で組まれた十字架がまるで傾くように前へ少し傾いているのが目に入る。元々風を受けたとかで傾きやすくなっていただけなのだろうが、このタイミングでは返事をされたみたいだと苦笑し、傾いたそれをまっすぐに直し周りの土を少し押し込んで固めたあと、美紀は一礼して立ち去った。

そうして無人になった屋上では、美紀の手でまっすぐに直されたはずの十字架が、風もないのにゆっくりと、揺れ続けていた。

この時、スタンドちゃんは下でゆきちゃんと談笑中。でもみーくんの言葉はちゃんと“スタンドちゃん”に聞こえています（満面の笑み）

パート 15 うんどうかい!

前回の初投稿を喜んでもらえたので初投稿です（支離滅裂な思考、言動）

こんにちは。

プレイヤーズには別段送りたくもなかった手紙を送り終えて数日。こうなるというヘリが落ちてきてもおかしくないので戦々恐々としながら過ごしていると、学園生活部の皆がボールに二色のテープを張って鍋を天井からつりさげたり廊下に線引いたり体育祭と書かれたポスター作ったりし始めました。体育祭と書かれたポスターが貼りだされるということはつまり体育祭があるという事です（某構文亜種）

このイベント、生きてればキャラの成長具合が感じられますが今のスタンドちゃんの状態だと当然、ほとんど関わられません。せいぜい玉入れでどっちかに加勢できる程度でしょうか。不正などない（真顔）

とりあえずボールの準備をこっそり手伝いつつ決行の日を待つことさらに数日。

そろそろプレイヤーの耳にヘリ爆弾の幻聴が聞こえ始めたあたりで体育祭が始まりました。位置についてよいドカンなんてタイミングはやめてくれよ？（フラグ）ヘリ爆弾が落ちてくると原作通りものすごい勢いで火事になるので一目散に地下を目指さないといけないですよねえ。落ちたヘリにつられて“彼ら”が大体外に出てしまうので普段よりはだいぶ楽ですけども（なお煙）

さて、体育祭の方ですがまずは廊下で徒競走。原作でも我がゴリラがシャベル背負ったままみーくんを負かしていましたね。忘れがちですがくるみちゃんも陸上部（しょっちゅう忘れてなんであんな動けるんだっけってなってる）なのでこういうのは完全に独壇場です。だが鳩には逃げられる。

という訳でくるみちゃんがシャベル背負ったまま全員の記録をぶっちぎり見事一位に輝きました（予定調和）ちなみに二位は太郎丸。流石の獣。脚力が違いますよ。続きまして、綱引き。こんなの原作にあったっけ？ まあいいか。メンバーは片方がゆきちゃん、りーさん、チョーカーさん。もう片方がみーくん、圭ちゃん、ゴリラという別れ方に。たった一頭で戦力差を広げて来るのが居ますね……（震え）かといって先生のめぐねえに加勢してもらおう訳にも行かず。これも予定調和的に

くるみちゃんのいるチームの勝利。こっさり物理干渉でゆきちゃんチームに加勢してみましたが、やはり直接の干渉力は貧弱すぎて結果は特に変わりませんでした。後ろの部分が誰も持っていないのに浮いている形になり、相手チーム先頭のみーくにガン見されましたが。

ちなみにその時のみーくんの表情は驚きではなく苦笑い。これ完全に存在認知されてますね。まさかよりによってロジカル思考持ちで面識もないみーくんが霊視無しで確信する一番乗りになろうとは……読めなかった！（海のリハク）

バレてる以上、玉入れに加勢するのはやめときましょう。視線が痛い（雑魚）

その後は何事もなくすべての種目がこなされ、閉会式という名の後片付けが始まりました。原作だどこでみーくんとりーさんがギスりますけども今回はそんなことありません。やっぱ余裕あるっていいわぁ。もうすぐ燃えてなくなるけど（無慈悲）

「あっ 太郎丸！ どこいくの？」

突然太郎丸が走り出し、それをゆきちゃんが追いかけて行ってしまいました。行先は屋上の階段。さてはヘリが来たな？ 音量を上げて耳を澄ましてみると、今

度は幻聴ではなく確かにヘリの音が聞こえてきます。こういうところ細かいなこのゲーム（今更）

どうやら放送イベント以外のタイミングでヘリが来ると太郎丸が感知役やってくれるという事そうですね。わざわざ墜落の瞬間を見逃さないように配慮された仕様。制作陣は間違いなく愉悦部（確信）

という訳でちょっと放送室の様子見て来る（火災避難訓練放送スタンバイ）

【キャラ視点】

（最近、学校が好きだ）

由紀^{ゆき}は突然走り出した太郎丸を追って2年生の教室を横切っていく。

（何でもあって、まるで一つの国みたい。こんな建物他にない）

太郎丸の走る方向には音楽室、化学実験室など。下の階には被服室や図書室、電算室なんてものまである。

（中でも私が好きなのは）

学園生活部。最近になってクラスメイトと一緒に所属するようになった部活。夜

まで練習して帰りが遅くなる部活は数あれど、全く帰らないなんて本当に変な部活だとは思ふ。それでも所属したことは心の底から良かったと言い切れる。

やさしい先生、頼りになる同級生、最近は後輩もできた。彼女らに囲まれて、毎日が楽しいことの連続だ。

——だからだろうか。少し前からずっと、大切な何かを忘れている気がするのに、いつの間にか気にならなくなっていたのは。もっとも、気にしたとしても頭が痛むだけで何も思い出せないのだが。

「あれ？ そっちは屋上だよ、太郎丸！」

ふと気づけば追いかけていた太郎丸は学園生活部部室の方ではなく、途中で直角に曲がって屋上へと続く階段を器用に昇りだした。後輩の圭がこの子犬を見つけたのは肝試しで二階を探索していた時だったというし、その時もこうして上がってきたのだろう。

素早く一番上までたどり着いた太郎丸は屋上へと続く扉の前で吠え始める。

「出たいの？」

由紀の問いかけを理解しているのかいないのか。扉の向こう側への吠え声は少し

ずつ大きくなっていく。

「もしかして誰かいるの？ 園芸部の人かな……」

それなら吠え声で驚かせてしまったかもしれない。怒っていないだろうか、と由紀は恐る恐る扉を開いて様子をうかがい、そこにいた人物を見てほんと胸を撫で下ろした。

「なんだ、あやちゃんか」

よく見知った人物、紋あやがゆつくりと振り返る。いつも着ている黒いローブを今は脱いでいるようだがその姿は間違えようもない。

「園芸部の手伝い？」

見れば制服が土で汚れている。ローブを着ていないのも納得だ。アレを着て土仕事などやったら袖の中が土でいっぱいになってしまっただろう。

「あれ？ その腕どうしたの？ ケガ？」

腕に巻かれた包帯が目に入った時、忘れていたことすら忘れていたはずの“何か”が再び頭の片隅に引っかかりだす。

「そっか、そういえば折れちゃったって……あれ？ でもさっきまで」

違和感が頭の中で膨れ上がっていく。腕の骨を折ってしまったという話には確かに聞き覚えがあるが、それはここ最近の記憶と矛盾する。紋はついさっき、両手で綱引きに参加していたはずだ。途中で乱入した形になり、挙句に負けて相手チーム先頭の美^み紀^きに苦笑いされたものではっきりと覚えている。

由紀の顔を冷や汗が伝う。明らかに、何か大事なことを忘れている。だが思い出しそうになると邪魔をするように激しい頭痛が襲ってきて過去^この記憶が霧散していく。

思わず頭を両手で抑えて、ふらつく足で必死に倒れ込まないよう踏みとどまる。目の前の紋が包帯の無い方の手を伸ばして近寄ってくる。他人に何かあった時、紋はよく心配そうな表情を浮かべてそうしていた。結局そこから声をかけられず無駄に終わることが多かったのだが。

何故だかひどく懐かしい気持ちになって、由紀は紋の伸ばした手を取ろうとした。取ろうとしたところで、ふと紋が最初にいたあたりに倒れている、木で出来た大きな十字架が目に入った。それが紋と一緒に視界に入ると、頭痛がさらに激しくなっていく。

パート 16 襲来、ヘリ爆弾

復活早々再失踪しかけたので初投稿です（アへ顔）

こんにちほ。前回ヘリ爆弾の接近を（太郎丸が）感知したので火災に備えて避難訓練放送をいつでも流せるよう機材スタンバイしに来ました。

来ましたが、ヘリより先に別の非常事態が襲ってきました（白目）

「ゆきちゃん!？」

りーさんの叫び声に反応して教室側の様子を見に行ってみればそこには肩から血を流してぐったりしたゆきちゃんの姿が。転んだのかな？（現実逃避）

……はい、どっからどーみても噛まれてますね。なんでや！　いくら何でも屋上に直で“彼ら”スポンはしないはずですが……

「……あやだった」

ファッ!?!　いやそんなめぐねえだったんだみたいって言われても……ちゃんと乙

I G A I したじゃないですか？　そうしてH P O になったんなら感染度合いがいくら進もうが動くことは無いはずなんですがねえ（困惑）

なんらかの原因で回復した……？　いや、このゲームで回復なんてプレイヤーが何かしない限り……プレイヤーが……何か……

ん？

【パート7回想】

——幽霊モードで使えるコマンドの中には“周囲の仲間のゲージ回復”があります。回復量は大した事ありませんし、クールタイムもそんなに短くないので“彼ら”の目の前だとほぼ役に立ちませんが、こういう安全地帯では非常に有用です。

【パート12回想】

——HPに関しては圭ちゃんがまだ片足負傷状態なので、クールタイムが終わり次第すかさず範囲回復をかけ続けていきましょう。ドララァ！（貧弱クレイジード）

【現在】

周囲の“仲間の”回復……うーん、完全に“彼ら”化してないなら、自分自身な訳だし仲間判定、なんですかね？　部室でやってれば、抜け殻ちゃんの埋まって

た屋上は範囲内でもおかしくないし……スタンドちゃんがめぐねえとして抜け出している以上、人として生き返りはしないけど、ギリギリ“彼ら”の一員として動ける範囲の数値まで回復させてしまったとみて良いでしょう。

つまり私のガバです（結論）

やってしまったものは仕方がないので直ちにゆきちゃんを治療しましょう。

現在屋上のドア閉めて幽閉中だという抜け殻ちゃんはどう敵判定でしようし安心して回復撃てますね（白目）

とはいえこれも時間稼ぎにしかありません。この隙に誰かが地下で薬取ってきてくれて初めてゆきちゃんが助かります。例の水毎日飲んでるのに何で薬要るんだよって思ってたんですが、あの薬、ほぼ栄養剤らしいし多分助かるのに体力がめっちゃ必要なんでしょう。原作のくるみちゃんも尋常じゃない苦しみ方してましたし、めぐねえはめぐねえになってしまったわけですから。え？ 水だけで助かったみーくん？ 知らんな（チャー研警官）

あれ、でもどうやって地下の薬の事皆に伝えれば……詰んだか？（絶望）

「みんな、これを見て！」

おっ？ 緊急避難マニュアルやんけ！ りーさんナイスウ！ 画面外で読んどいてくれてたみたいですね。これくるみちゃん辺りが地下に走って行ってくれば間に合う！

いやーよかったよかった、流石に原作主人公さよならエンドはちょっとね？

まあひょっとしたらスタンドちゃん同様にめぐねえになって抜け出してくるかもしれないですが。

ところで、なんか忘れてる気がするな？（痴呆）

あっ　へり爆弾……

【キャラ視点】

「^ど退けえ！」

咆哮と共にフルスイングされたシャベルに側頭部を打ちすえられて倒れ伏した“彼”の横を素通りし、さらに別の“彼女”に蹴りをお見舞いして階段から突き落とし、動かなくなったのを確認しつつ遠巻きに通り過ぎ、素早く1階に到達した胡桃^{くるみ}

はそのまま廊下の端に向けて全力疾走する。

陸上部だった胡桃にとって全力疾走などそれほど珍しくなく、それらはいずれも真剣に、必死に取り組んできたものだったが、それでも間違いなく今回のこれが今までの人生で一番必死に走った瞬間だろう。

走っていると、陸上部で過ごした日々と共に浮かんできるとあの人の顔。そしてその最期。

噛まれた人間がどうなるのかは嫌というほどわかっている。そしてそうやってしまった場合、どうしなければならぬのか、という事も。

時間が無い。きつと少しでも遅れたら、由紀ゆきに対してあの日先輩にしたのと同じことをしなければならなくなる。もうすでに一人、そうするしかなくなってしまう。このうえ、さらに由紀まで……想像してしまう。今でも時折蘇るあの時の感情が余計な気を効かせ、想像をより鮮明な物にして突きつけて来る。

（嫌だ。それだけは絶対に嫌だ！）

きつと、今度は耐えられない。あの時何とか耐えられたのは二人がいてくれたおかげなのだから。たとえ手を下すのが自分以外の誰かになっても、今の胡桃

を人間たらしめている何かがなくなってしまうことに変わりはない。

この世界に神様がいるとしたら、なんてひどいことをするのだろう、と思う。大切な人を殺させて、失わせて、また与えてくれたと思ったら、今度はまた殺せと言うのか。

ふざけるな

無意識に噛みしめていた奥歯がぎりっという音を立てたのに気付いて、今は神を恨んでいる暇すら惜しかったのだと思い出し、走ることに近くの物陰を警戒すること意識を集中する。

集中したおかげで、その違和感に気づくのに時間は必要なかった。

（変だな）

一体どうしたというのか、いつもならとびっきりの危険地帯であるはずの1階にほとんど“彼ら”がいない。嫌な予感がするが、やはり時間が惜しいためこれ幸いと突っ走る以外の選択肢を選ぶことができない。

割れた窓のそばを通る際、何かの機械音のようなものが外から響いているのが聞こえた。バリバリと空気を連続で叩くような音は平和な頃に聞いたことがあるもの

だった。

（まさかヘリコプターの音か？ 救助が来た？ ……よりによって！ 今はマズい！）

救助だとすれば何故あと1日早く来てくれなかったのだろうか。昨日の自分たちであれば大手を振って助けを求められたのに。

ヘリを恨んだところで由紀の状態は改善しない。そしてこの状況で噛まれた者がどう扱われるかなど想像がつかなかった。一番良くて救助はされるが隔離。それがダメで見捨てられるならまだしも、解剖だとか、実験だとか、死ぬよりひどい目に遭わされる可能性だってある。どうあれ良い結果にはならないだろう。

あれほど望んでいたはずの救助に、今だけはそのまま通り過ぎてくれと願いながら、胡桃は地下室に続く、机が挟まって半開きのシャッターを潜り抜けた。

地下室には豊富な物資が引き出し付きの棚に整頓して並べられており、薬の類が入っている引き出しもすぐに見つかった。

「あった！ これか……頼むぞ」

目当ての薬もすぐに見つかり、背負っていた非常袋に詰め込むと、これまでの

ルートを逆走するべく踵を返す。

これで由紀は助かるかもしれない。近くを飛んでいたヘリのは気がかりだが、それは由紀のことをどうにかした後か、あちらから来てしまった場合に考えればよい。今は一刻も早く仲間たちのところへ戻ることに集中しなければ。

そう気合を入れ直して階段に足を掛けた瞬間だった。

「……!?」

耳をつんざくような轟音。おそらくは爆発音だろうか。突如として鼓膜と階段を揺らすその振動が胡桃に襲い掛かってきた。

地下にいたおかげで、大きな音ではあったが耳がやられるなどの厄介な事態にはならなかった。だがそれでも胡桃の心臓は鼓動のペースを異様なほど早めていく。

「まさか……」

鼓動だけでなく息も荒げながら階段を1段飛ばしで駆けあがる。

そしてシャッターをくぐった時。その光景を見て胡桃は確信した。

この世界には、きっと神様がいる。

ただしそいつは、最低最悪の外道だ。

「なんでこんな事するんだよ、あたしたちが何をした!? どうしてこんな目に遭わなきゃいけない!? ふざけるな……ッ! ふざけるなあああッ!!」

窓の外で燃え盛るヘリの残骸と、炎に包まれた“彼ら”が転がり込んできたことで燃え始めた廊下を涙のにじむ瞳で睨みつけながら、胡桃は喚くように、ありったけの怨嗟を吐き出した。

ハードコアモードの本領発揮DA!
(プレイヤーのガバが原因の事態から目を
背けながら)

がっこうぐらし! 守護霊ルート通常 プレイ

著者 景名院こけし

発行日 2021 年 8 月 31 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/207687/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。